

Fate
フェイト/ゼロ

11

真・聖杯戦争

セイバーの
知能がない

暇夜の会場で住み入れた
ライダー陣営の居所を
目指して発ったか

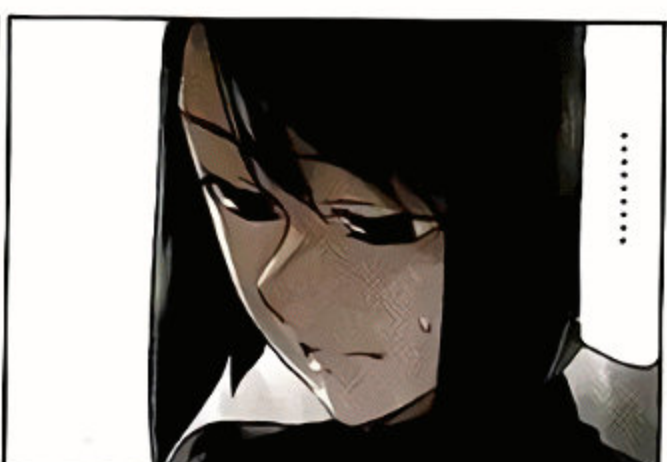
セイバーがライダーを
引きずり出しさえすれば
見習い魔術師の
マスターの暗殺など
もはや容易い



彼女の状態は
今は……

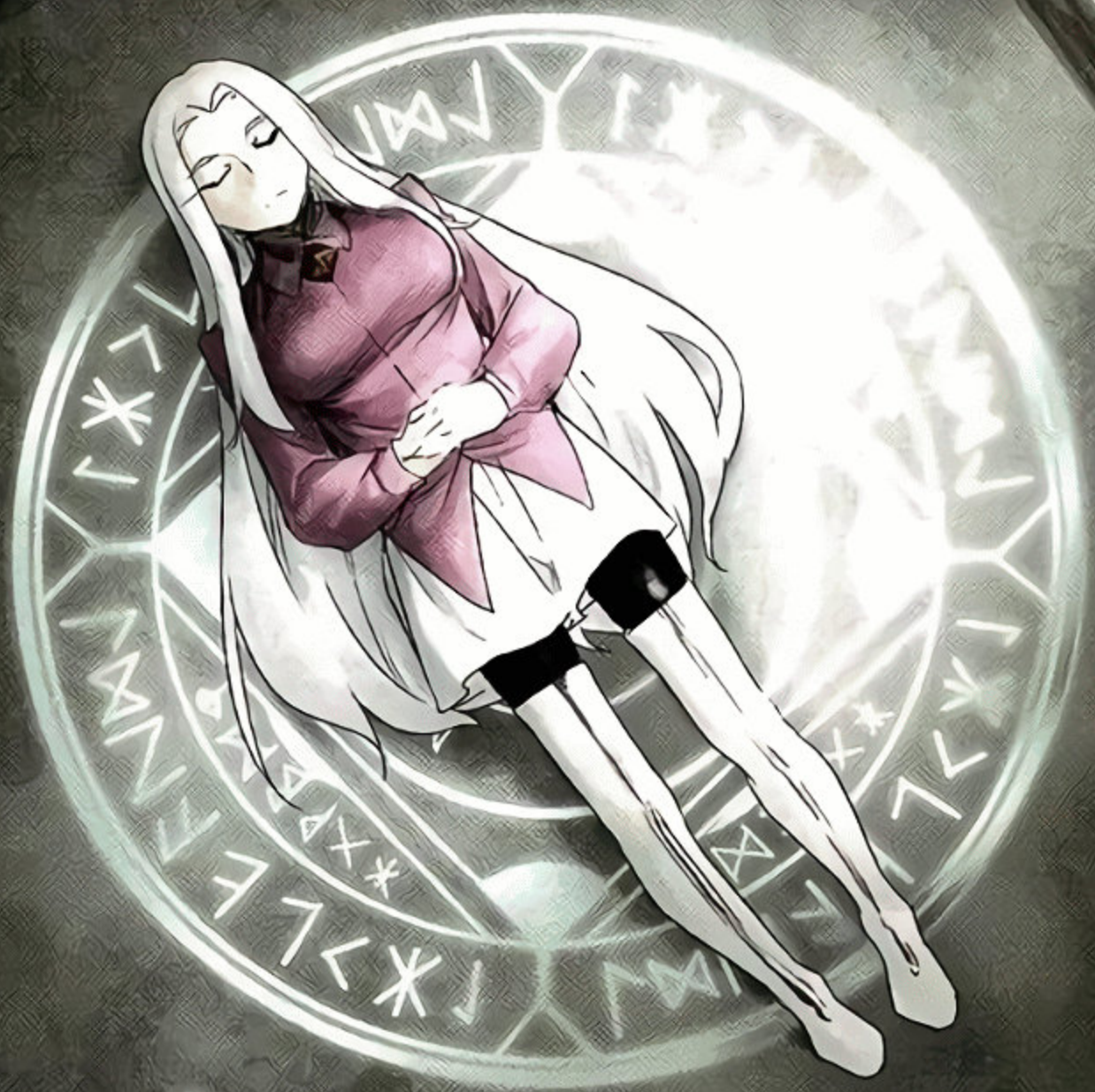


解っている
承知の上だ





第 52 話



Fate **Zero**
フェイト/ゼロ

漫画 真じろう
原作 虚淵玄 / TYPE-MOON
(ニトロプラス)

Fate
フェイト/ゼロ



11
Contents

第 52 話

001

第 53 話

037

第 54 話

069

第 55 話

103

第 56 話

133

番外編

◆Master's personality◆

171



キラツグ
だ——

あ——



——夢じゃ
ないのね



ああ
そうだよ

本当に——
また逢いに
来てくれた
のね——



夫と娘と
九年も……

あなたは
全てを与えて
くれた……

私には望むべくも
なかったこの世の
幸せの全てを……



私はね……

幸せだよ……

恋をして……

愛されて……



色々な
約束を果たせ
なかった



……
すまない



ううん
いいの
もう

私取り
こぼした幸せが
あるなら……
残りは全部
イリヤにあげて

あなたの娘に——
私たちの大切な
イリヤに

いつかイリヤを
この国に連れて
きてあげて

サクラの花を
夏の雲を……

あの子に私が
見られなかった
ものを全部……
見せてあげて

わかった

これを……
返さないと
……ね……

ホム





判った

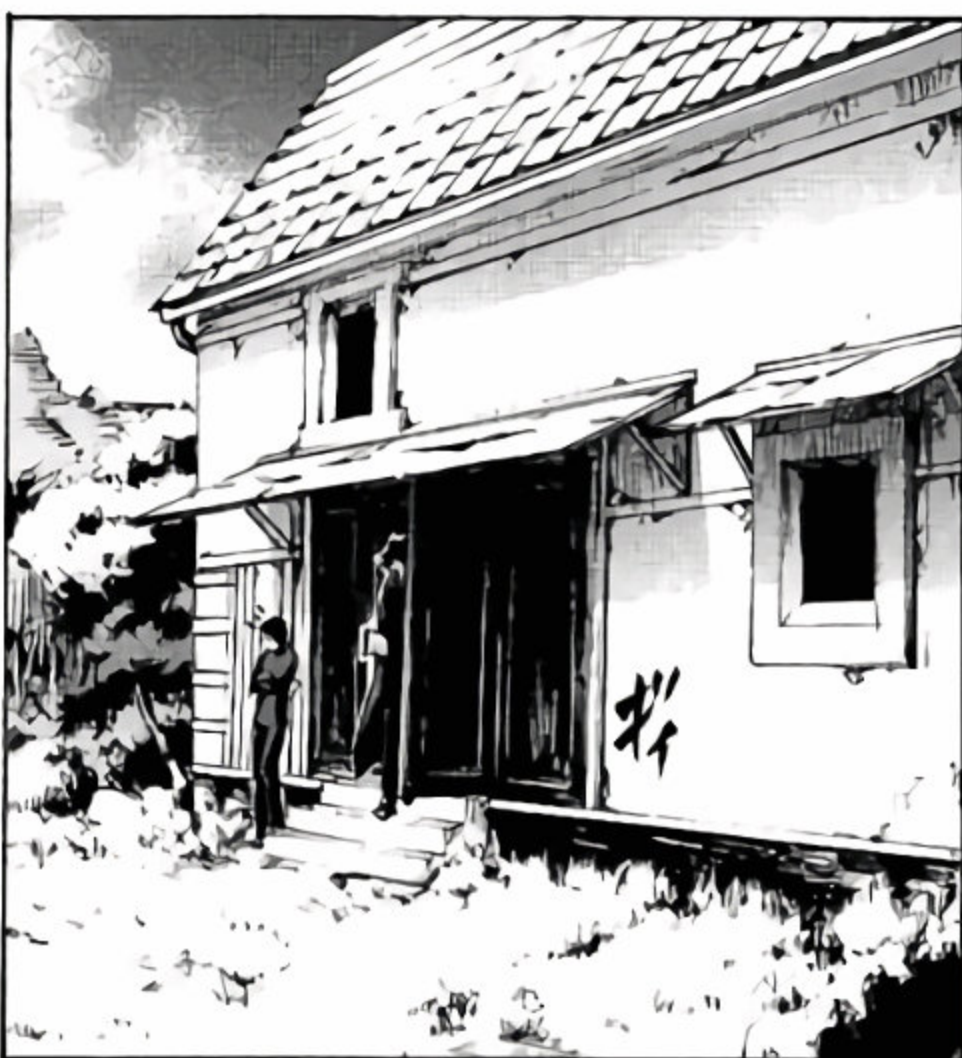


じゃあ
行って
くるよ



はい

お気を
つけて
あなた



今日じゆうに
ライダーの
マスターを
仕留めてくる

セイバーは
先行して
いるな？



……はい
今朝方あなたが
来る少し前に

よし——舞弥
君は引き続き
アイリの
奮闘を頼む

分かり
ました…

あの切嗣？



どうした？



昔の
あなたの
顔に

やっと
戻り
ましたね



……そうか



ここが何処だか
解ってるよな？

オマエを
召喚した
場所だよ

霊格は極上とは
言わないまでも
それなりだし

あの晩の
魔法陣もまだ
解れてない

オマエにとって
冬木でいちばん
相性のいい地脈は
ここだろ？

回復の効率も
段違いに
捗るはずだ

ボクは
今日一日
ここにいます

何もしないで
寝てるから
死なない程度で
いくらでも魔力を
持っていけばいい

そうすれば
オマエも少しは
マシになるだろ

……ははは
気付いたなら
気付いたときに
そうと言えよ

後になって見透か
されていたらと解る
つてのはいささか
面映ゆいぞ

バカ！
オマエこそ
さっさと
言えよ！

いざって時に
オマエが
動けないとボクが
危ないんだからな

なんだよ！
ここで不甲斐なさを
恥じるべきなのは
ボクの方だろ！

いくらライダーでも
「王の軍勢」ほどの
大道具を二回も
使用して平気で
いられるはずがない

実体化を控えるほど
魔力を節約しているのは
明らかにボクからの供給が
回復に要する消費に
追いついてないからだ！

結局オマエの
切り札って実は
とんでもなく魔力を
食い潰すんだろ

いやあ
規模の割には
燃費は良いぞ

軍勢の連中は召喚
つつうか勝手に
押しかけてくる
ようなもんだ

それから皆が
絶出で結界を
維持するわけ
だからな

嘘つけ
あれだけ馬鹿げた
大魔術なら
発動するだけでも
大事なんだ

その点 最初に
号令をかけるのは
オマエ一人
なんだから

「座」にいる連中に
呼びかけるだけで
とんでもなく消耗
するはずだろ

余は連中の
骨折りに
よりかかっている
だけで済む





ボクは――

それで
いいんだ



聖杯を
ただオマエに
獲ってきてもらう
だけなんて嫌だ

これはボクが
始めた戦いだ

ボクが血を流して
犠牲を払って
その上で勝ち
上がるんでなきや
意味がないんだ



聖杯の使い途
なんて知るか！

確かめたい
だけだ！

ボクはな
後のことは
どうだっていい

ただ証明
したいだけだ！

このボクが――
こんなボクにだって
この手で掴み取れる
ものがあるんだ
ってことを！

——だが坊主
そいつは聖杯が
本当にあった
場合の話だよな？

……え？

皆が血眼に
なつちやあ
いるが

件の冬木の聖杯
とやらが本当に
雪通りのシロモノ
だって保証は
どこにもない

違うか？

そりや
そうだけど

でも……

余はな
以前にもそういう
在るか無いかも
知れぬモノを
追いかけて戦った
ことがある

最果ての海を
見せてやると——
そう吹き散らしながら
余は世界を荒らしに
荒らして廻った

余の口車に乗って
戦いもせずに
ついてきた
お調子者を随分と
死なせた

どいつもこいつも
氣持のいい
馬鹿揃いだつたよ
そりや奴から
先に力尽きていった

最後まで余の語った
最果ての海を
夢に見ながらな

最後には命を懸う
小利口な魂中の
おかげで東方遠征は
御破算になった

だがそれで
正解だった

あのまま続けていけば
余の軍勢は何処に
廻り着くこともなく
総壊れて終わったことだろう

この時代の知識を
得たときは、まあ
結構なわい

だがそれでも
地図を見れば納得
するしかなかった

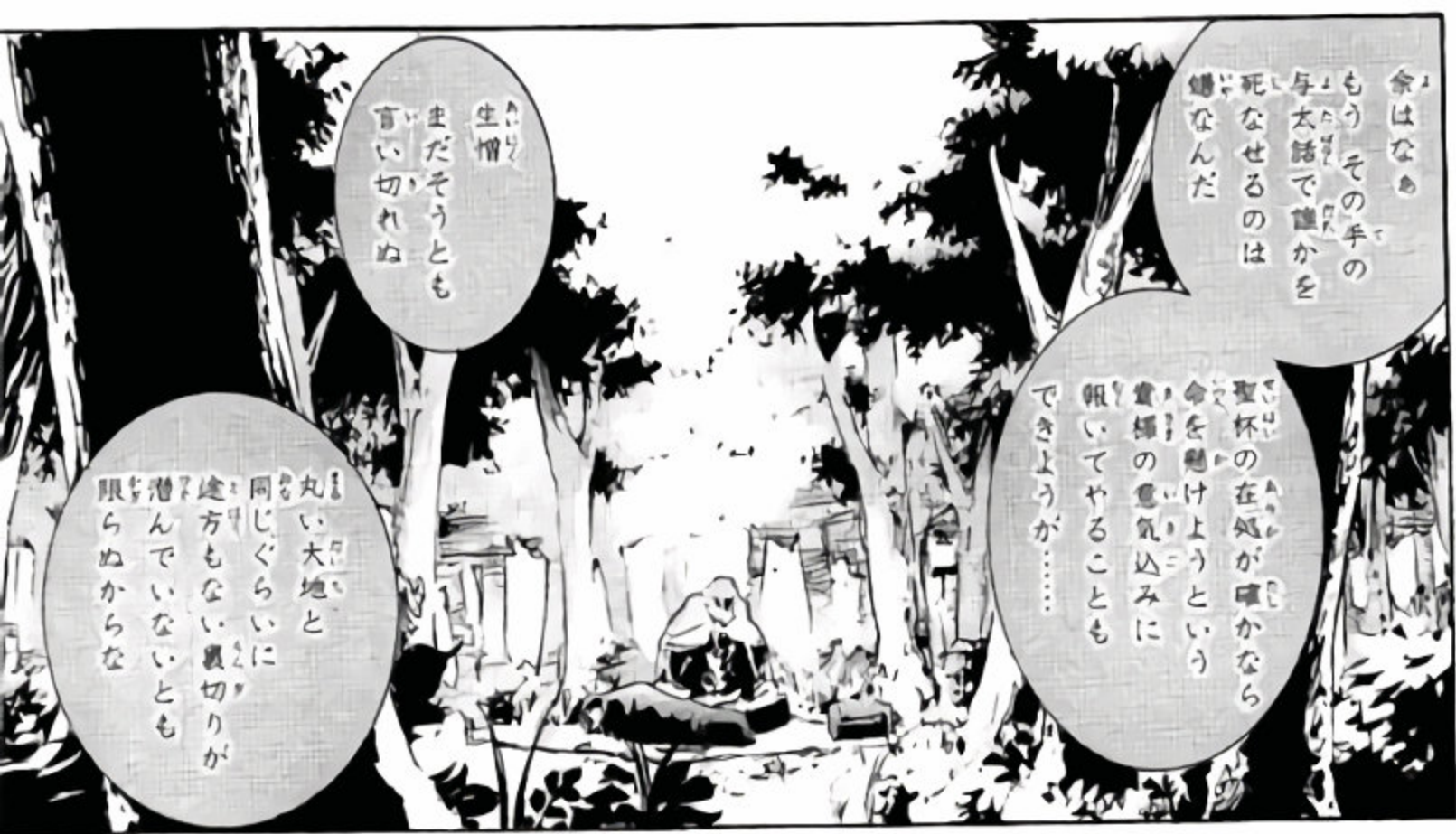
最果ての海なんて
何処にもありや
しなかった

まさか大地が丸く
閉じているなんて
悪い冗談にも
程がある

余の理想は
ただの妄想で
しかなかった



おい
ライダー
……



余はなも
もうその手の
与太話で誰かを
死なせるのは
嫌なんだ

聖杯の在処が確かなら
命を懸けようという
貴様の意気込み
に
報いてやることも
できようが……

生憎
まだそうとも
言い切れぬ

丸い大地と
同じぐらいに
途方もない奥切りが
潜んでいないとも
限らぬからな



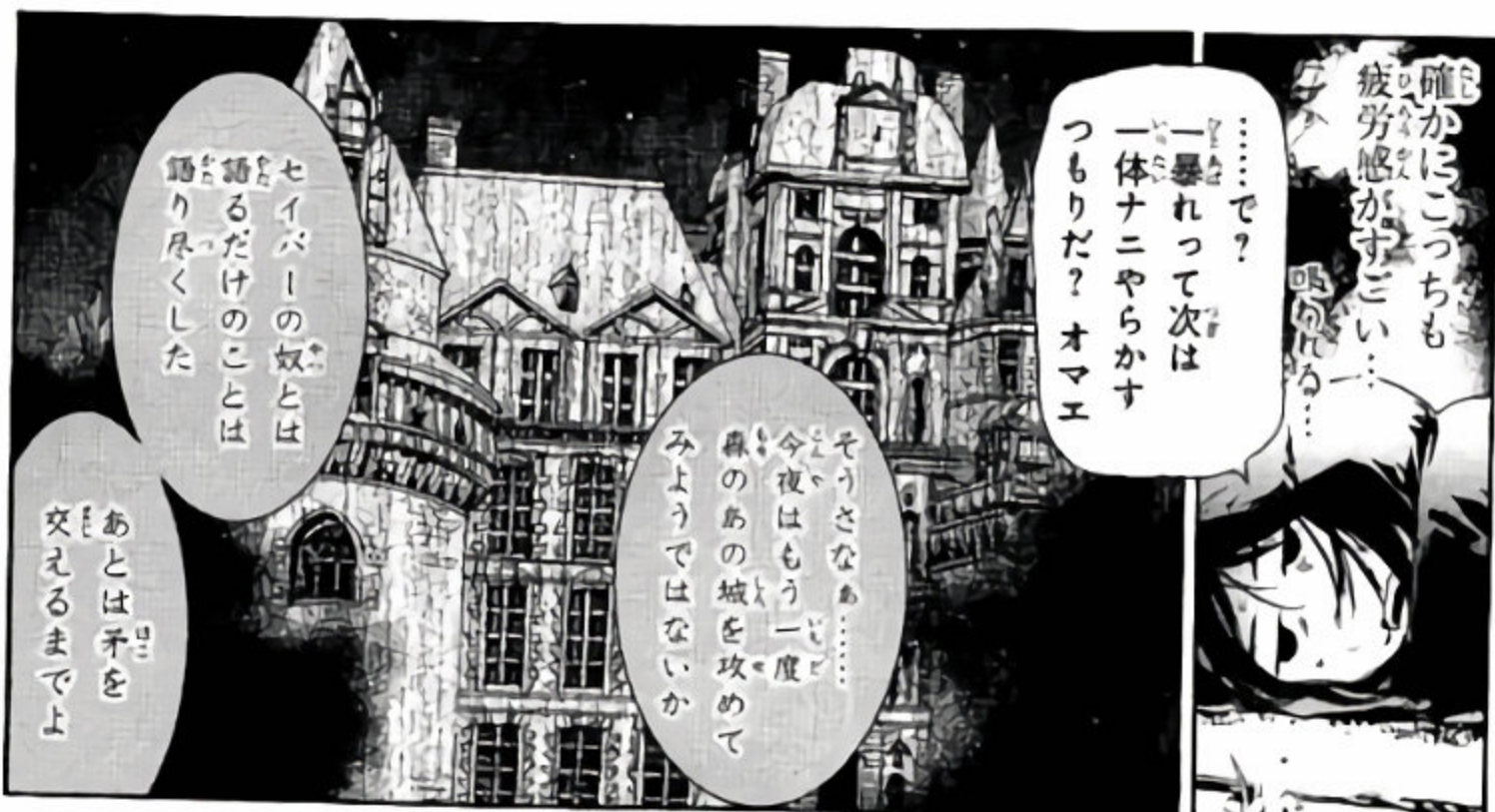
でもボクは……

それでも
オマエのマスター
なんだぞ

ハフハフハフ
坊主も言うように
なつたではないか！

うむたしかに
魔術回路の方も
昔段より感勢
良く廻つとる

地脈から吸える
分もあるし
日中休息すれば
夜にはまた一暮れ
できそうだな



確かにこつちも
疲労感がすごい……
鳴れる……

……で？
一暴れって次は
一体ナニやらかす
つもりだ？ オマエ

そうさなあ……
今夜はもう一度
森のあの城を攻めて
みようではないか

セイバーの奴とは
語るだけのことは
語り尽くした

あとは矛を
交えるまでよ



……この調子で
夜までに
どの程度まで
回復できそうだ？

計算だが
「神威の車輪」は
飛ばすだけなら
問題なからう

だが「王の軍勢」は
おそらくあと一回の
展開が限度だな



だったら……
なんでわざわざ
セイバーとも
戦うんだ？



使いだころとしては
対アーチャー戦だな

あの金ピカの
出鱈目ぶりには
余もまた切り札を
以て処するしかない

だから他の敵には
戦車だけで事に
当たることになろう



ん？

だってオマエ
もうアイツのことは
眼中にないみたいにか
言ってたじゃないか

余裕がないなら
今度は戦いの回数も
絞っていくべきだ

アーチャーは……
オマエ勝手に変な
約束しちゃったし
今さら後には退け
ないんだらうけどさ

セイバーは
他の奴に相手
させて脱落
するのを待つ
手だってある

カカフ
おいおい坊主
指があつたら頼に
一発かましてる
ところだぞ

なんだよ!!
ボクは当たり前
の戦略を話して
ただけだろうが!

デコピン
されてる
気がする
!?!

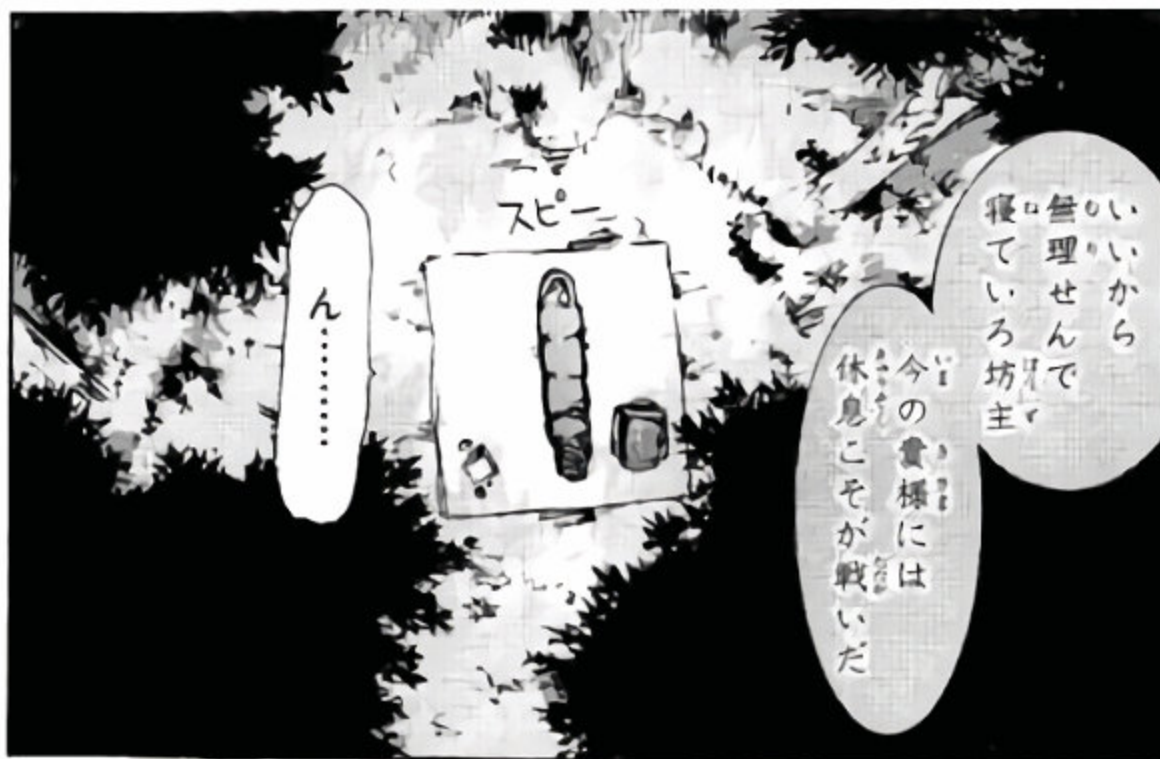
セイバーの奴めは
余が倒さねば
ならんのだ

それが同じ
美言としての
余の務めだ

あの馬鹿娘は
余が正しく征して
やらねば永遠に
道を踏み誤った
ままだらうて

それではあまりに
不憚に過ぎる

…何だよ
それ?



ん……

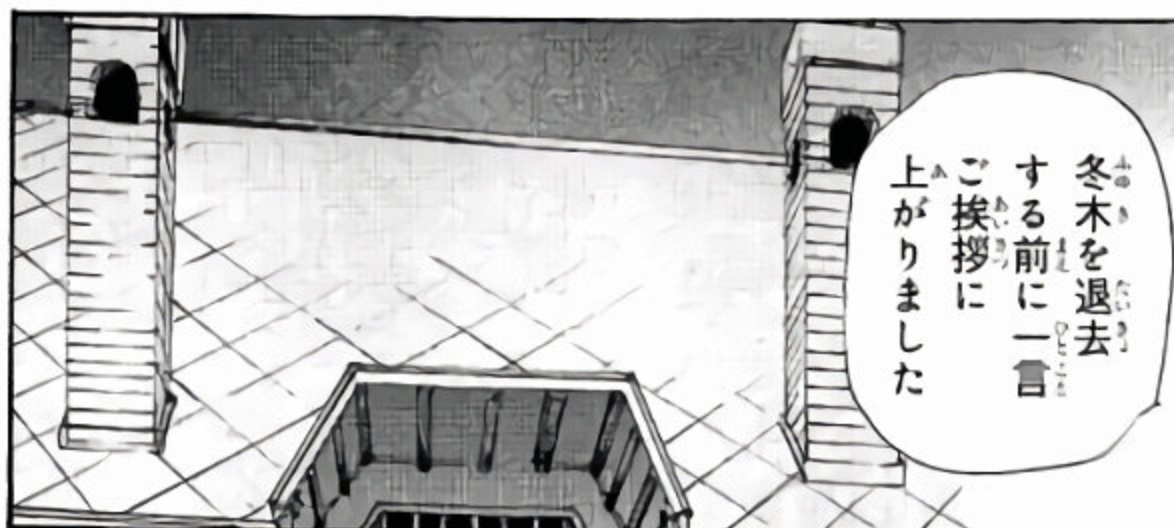
スピー

いいから無理せんで寝ている坊主
今の貴様には休息こそが戦いだ

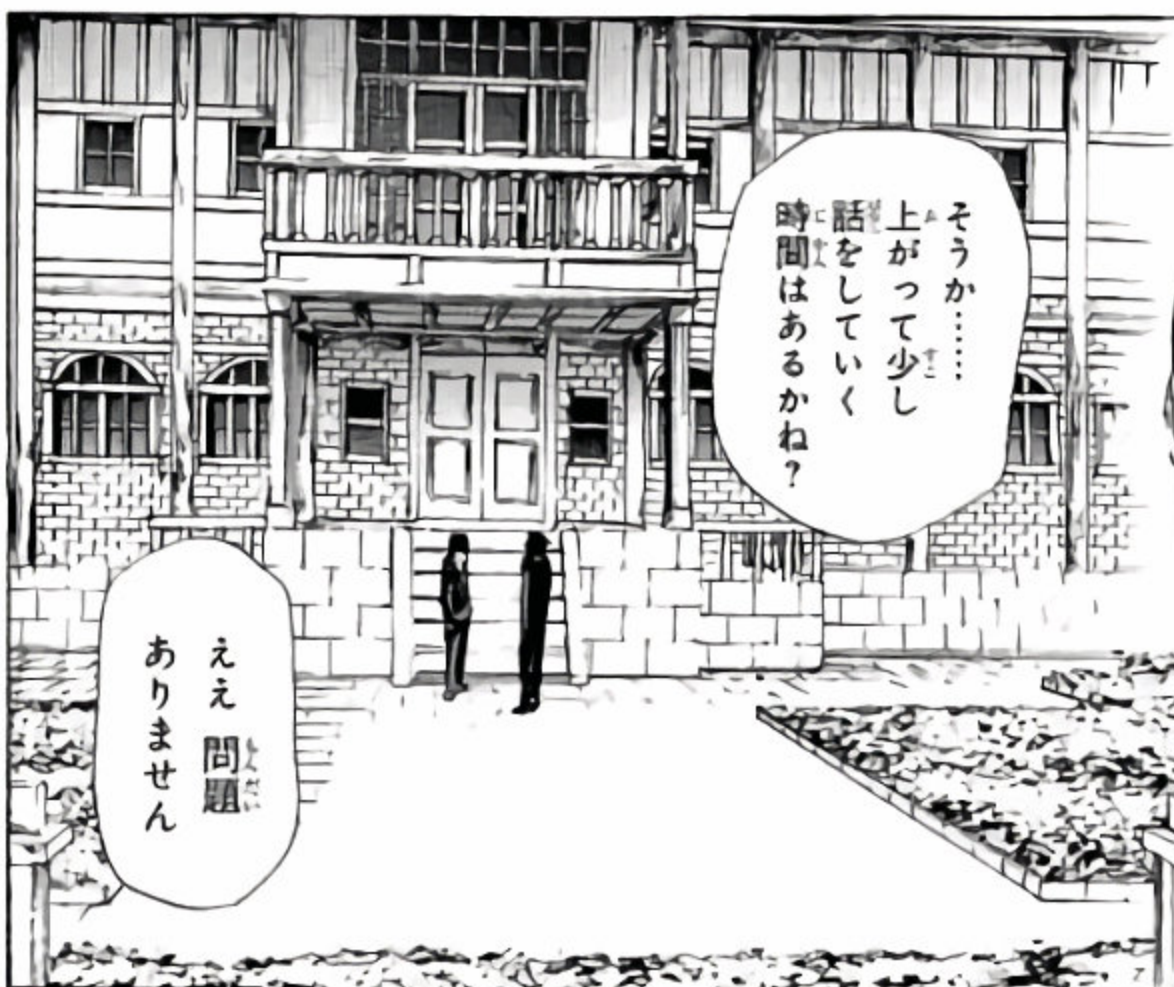


……まあ

好きにすれば……いいさ……



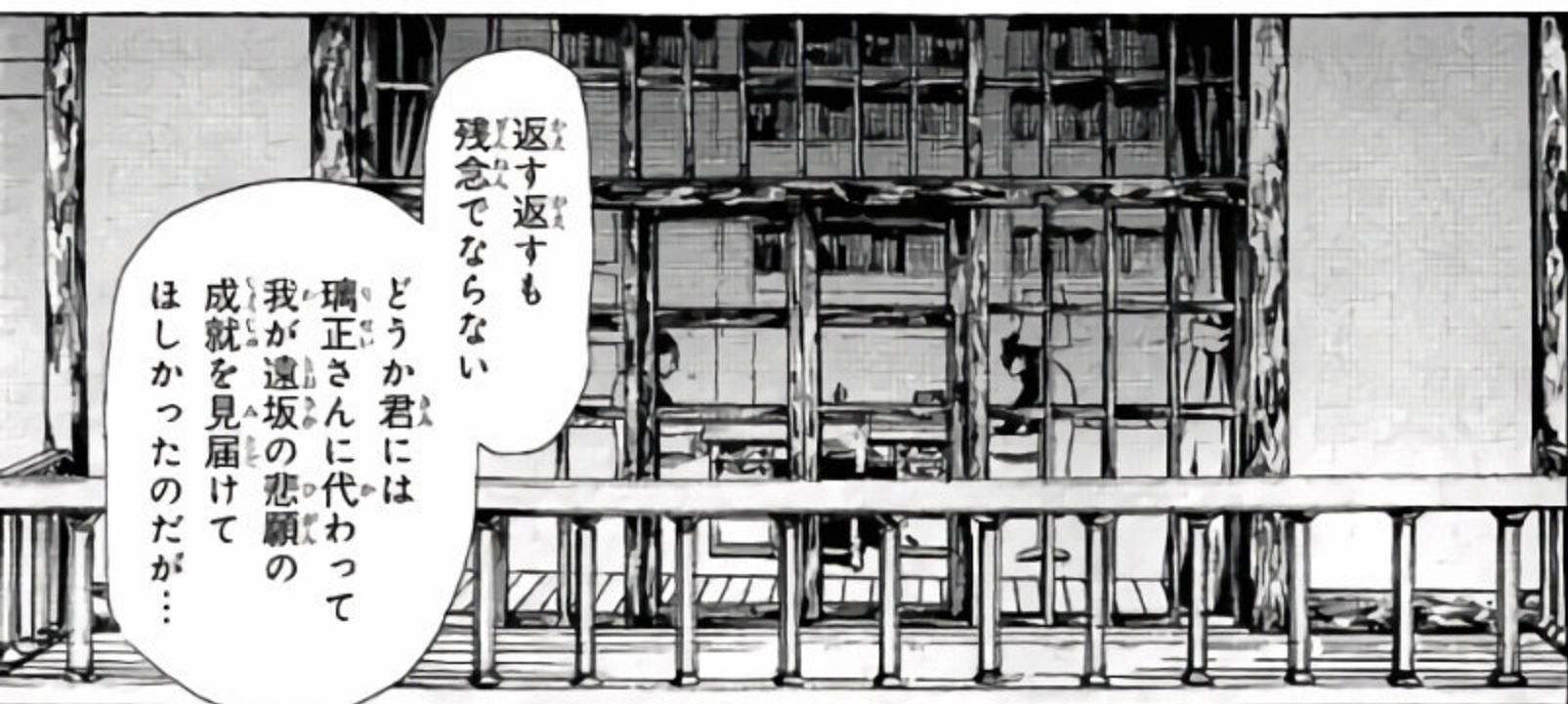
冬木を退去する前に一言ご挨拶に上がりました



ええ問題ありません

そうか……上がって少し話をしていく時間はあるかね？





返す返すも
残念でならない

どうか君には
璃正さんに代わって
我が遠坂の悲願の
成就を見届けて
ほしかったのだが…



そうと知っていれば
私とて昨夜の会合に
君を同伴したりは
しなかっただろう



導師には最後まで
ご迷惑をおかけ
してしまいました

面目次第も
ありません



君のスタンド
プレイはまあ
遺憾ではあるが

あくまで私に有利な
展開を期してのもの
だったのだろうか
と理解している

代行者なりの流儀
だったのかもしれんが
やはり私に対しては
事前なり事後なりに
一言欲しかった



たしかに我々を
引き合わせた
契機は聖杯戦争
だったわけだが

素養についてはまあ
致し方ないとはいえ
修練に励む求道者
としての姿勢は
私でさえ敬服させ
られるものだった

経緯はどうあれ
私は君という
弟子を得たことを
今でも誇りに
思っている



なあ綺礼
どうか今後とも
亡きお父上のように
君もまた遠坂との
縁故を保って行って
ほしいと思うのだが

どうだろうか？

願ってもない
お言葉です



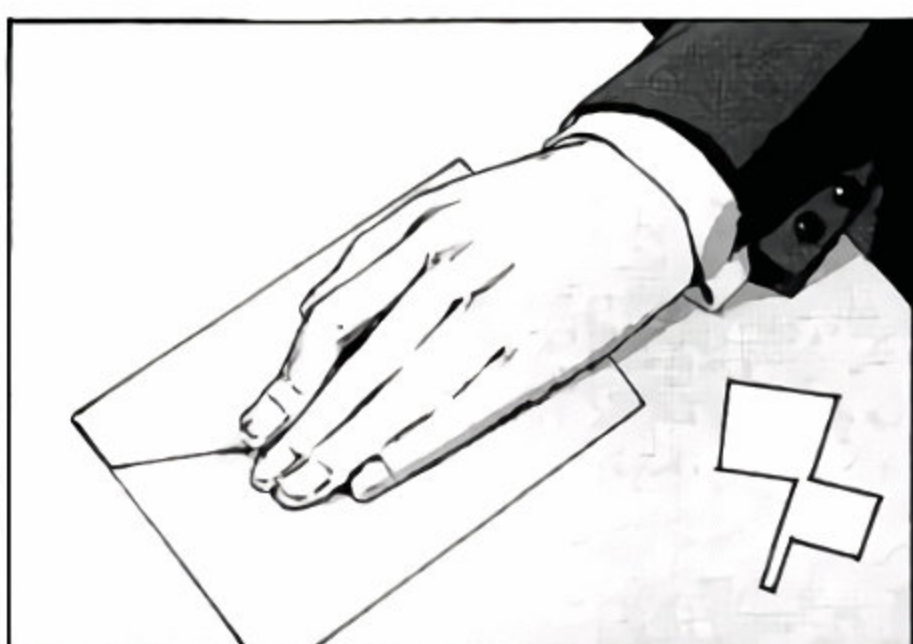
まさに君は鑑と
なるべき人格の
持ち主だ

ぜひ我が娘にも
見習わせたい

今回の聖杯戦争が
終わった後も君には
兄弟子として凛の
指導に当たって
欲しいのだ



……導師
これは？



簡略なもの
ではあるが
遺言状の
ようなものだ

万が一
ということも
考えておくべき
だと思っ
てね

凛に遠坂の家督を
譲る旨の署名と
アレの成人までの
後見人として君を
指名しておいた

これを「時計塔」に
届けてくれれば
後の諸事は協会の
方で面倒を見てくれる



これは
君個人に対して
私から贈りたい

開けて
みたまえ



お任せください

不肖ながらも
御息女については
責任を持って見届け
させていただきます

ありがとう
綺礼



これは



アソット剣だ

当家伝来の
寶石細工でね
魔力を充填して
おけば礼装
としても使える

君が遠坂の
魔導を修め
見習いの課程を
終えたことを
証明する品だ



我が師よ……
至らぬこの身に
重ね重ねのご厚意

感謝の言葉も
ありません





これで私は
後顧の憂いなく
最後の戦いに
臨むことができる

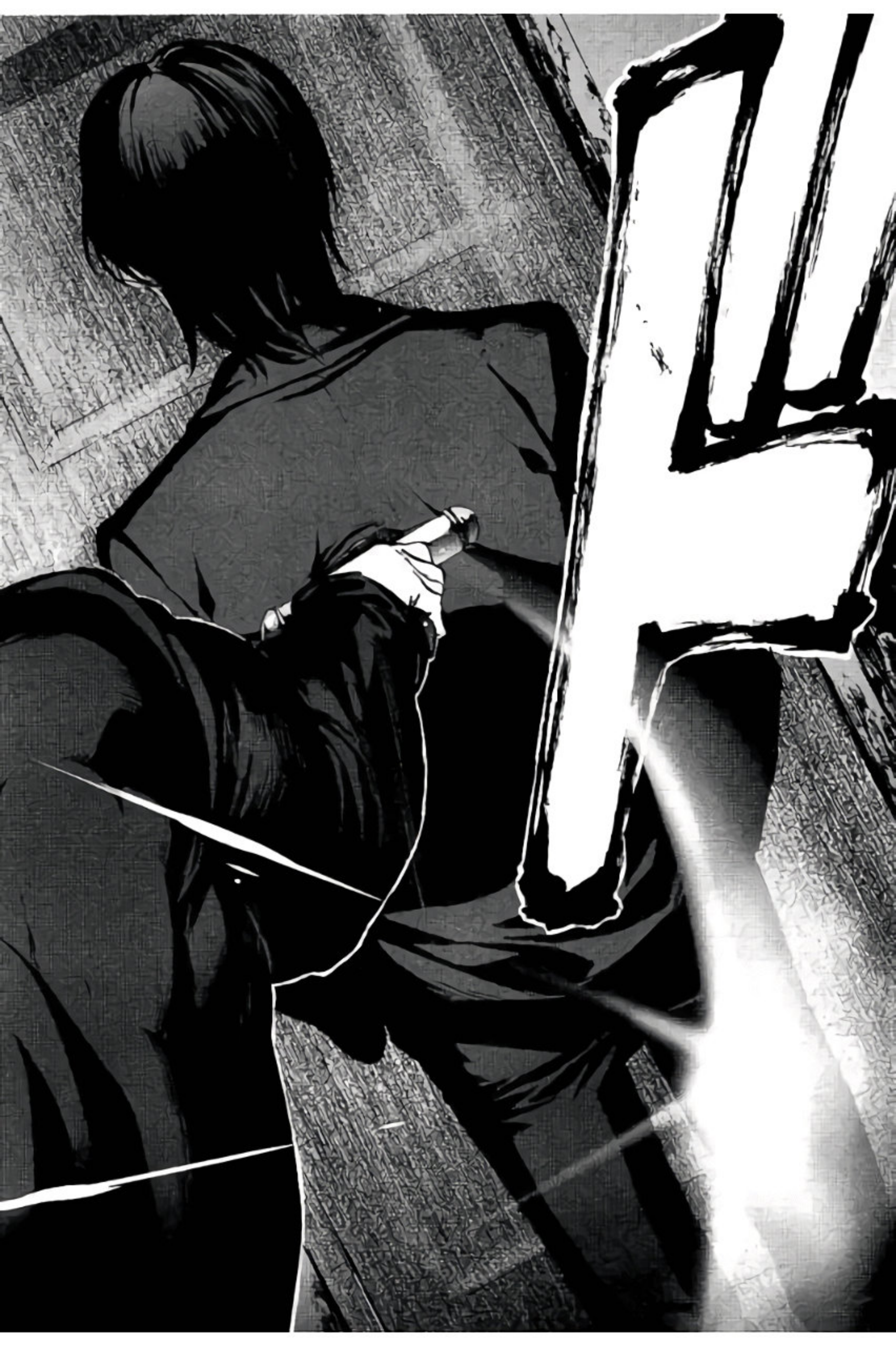
君にこそ感謝だ
言峰綺礼




長く引き留めて
しまつて
済まないね

飛行機の時間に
間に合うと
いいのだが

いえ 心配は
ご無用です
導師





もとより飛行機ひこうきの
予約よやくなどとして
おりませんので







フン
興奮
めな
幕
切れ
た



もう一悶着ぐらい
あるかと期待
していたのだがな

見よ
この間抜けた
死に顔を

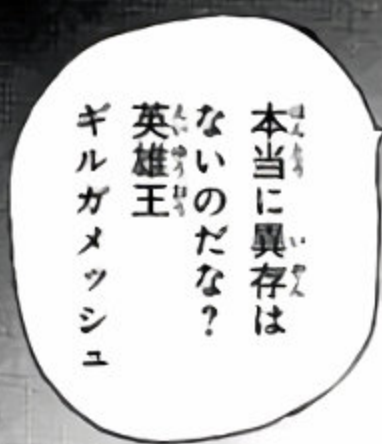
最後まで己の
愚劣さに気付か
なんだという面だ



すぐ傍に
靈体化した
サーヴァントを
侍らせていたのだ

油断したもの
無理はあるまい

早くも諸陣を
身につけたか
その進歩ぶりは
褒めておこう



本当に異存は
ないのだな？
英雄王
ギルガメッシュ



お前が我を
飽きさせぬ限りに
於てはな

さもなくば綺礼
お前もまたここに
転がっている骸の
ように打ち捨て
られるまでのことだ

覚悟を
問われるべきは
むしろお前だぞ



汝の身は我の下に
我が命運は汝の剣に

聖杯のよるべに従い
この意この理に
従うのなら――



誓おう
汝の供物を
我が血肉と成す

言峰綺礼――
新たな
マスターよ



さあ綺礼
始めるとしようか

お前の采配で
見事この笑劇に
幕を引くがいい

褒美に聖杯を
賜わそう



異存はない

英雄王
お前もせいぜい
愉しむことだ

望む答えを得る
その瞬間まで
この身は道化に
甘んじるとも

Fate 
フェイト/ゼロ

In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a sin called victory,
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

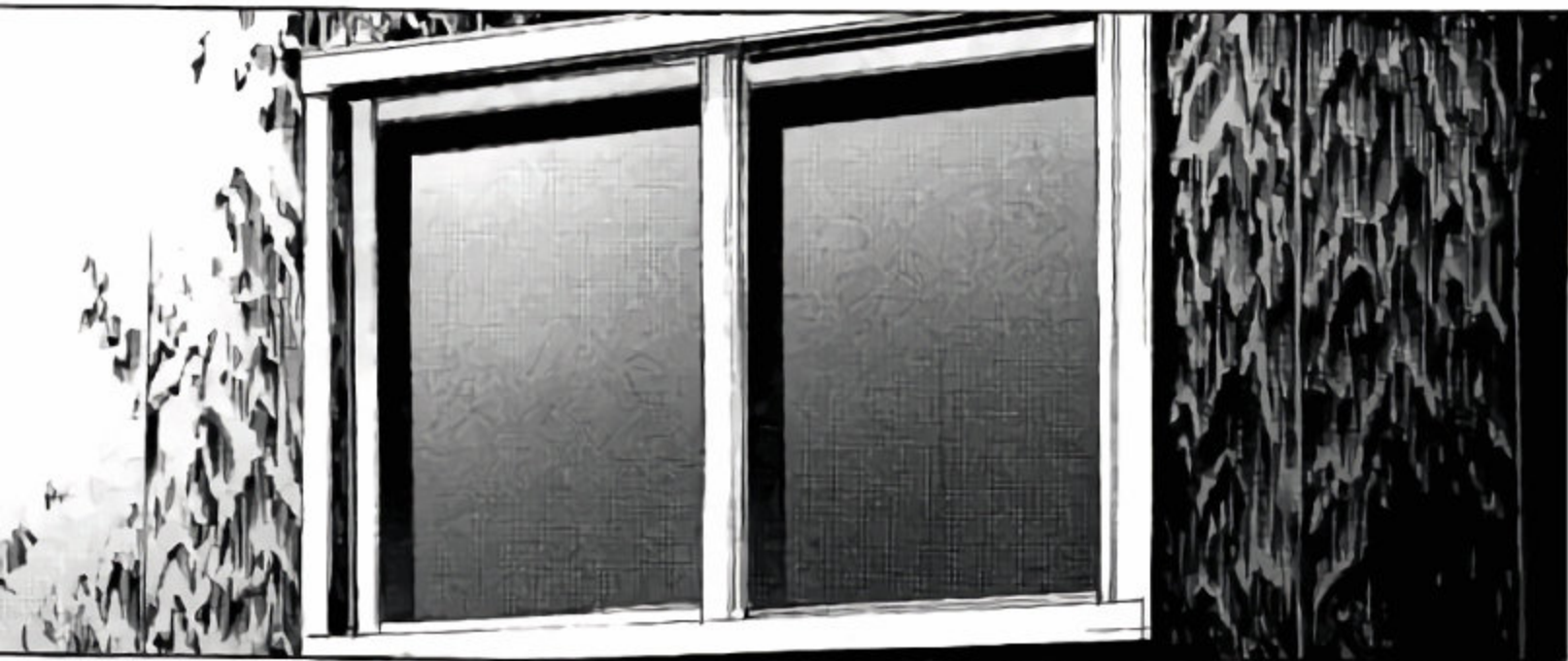
and at the least cost,

least time

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 53 話





住人の話では今は不在だが確かに孫とその友人が逗留しているとのこと

アーチャーのマスターからの情報通りだ

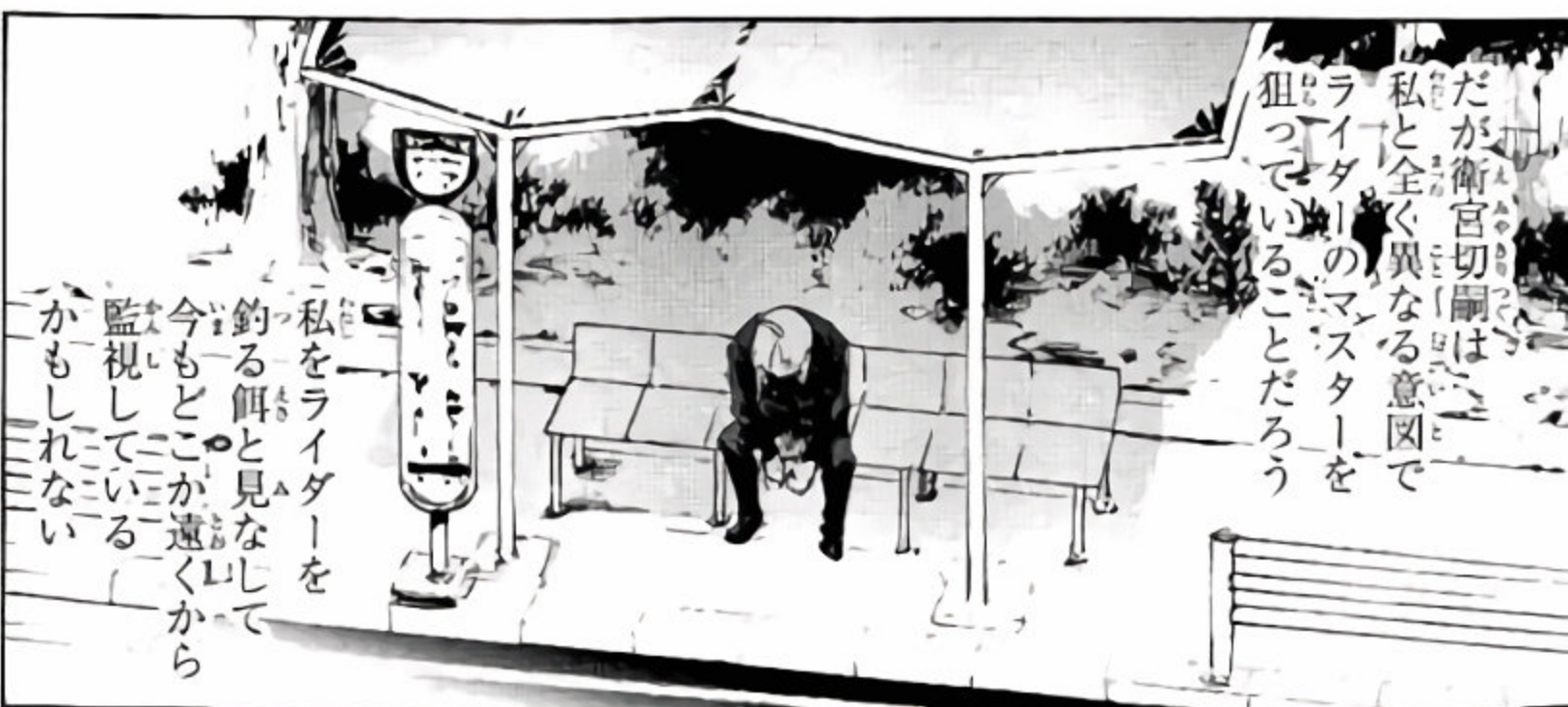


ライダーは逃亡するような輩ではない

行き違いになっただけか

あの家の住人はライダーのマスターに誑かされただけの一般人

奴が私の来訪に気付いたならば誇りを持って戦いに相応しい場所での対決を望むだろう



だが衛宮切嗣は私と全く異なる意図でライダーのマスターを狙っていることだろう

私をライダーを釣る餌と見なして今もどこか遠くから監視しているかもしれない

切嗣は切嗣なりに正しく切実な理由で聖杯を求め欲している

必勝を万全としたい気持ちも解らないではない

『王の軍勢』

アイオニオン・ヘタイロイ

最大出力の「約束された勝利の剣」でも必勝を確信することは難しい

そんな危険な賭けを切嗣が許容するはずがない

それでもライターの決着だけはとうあつても譲れない

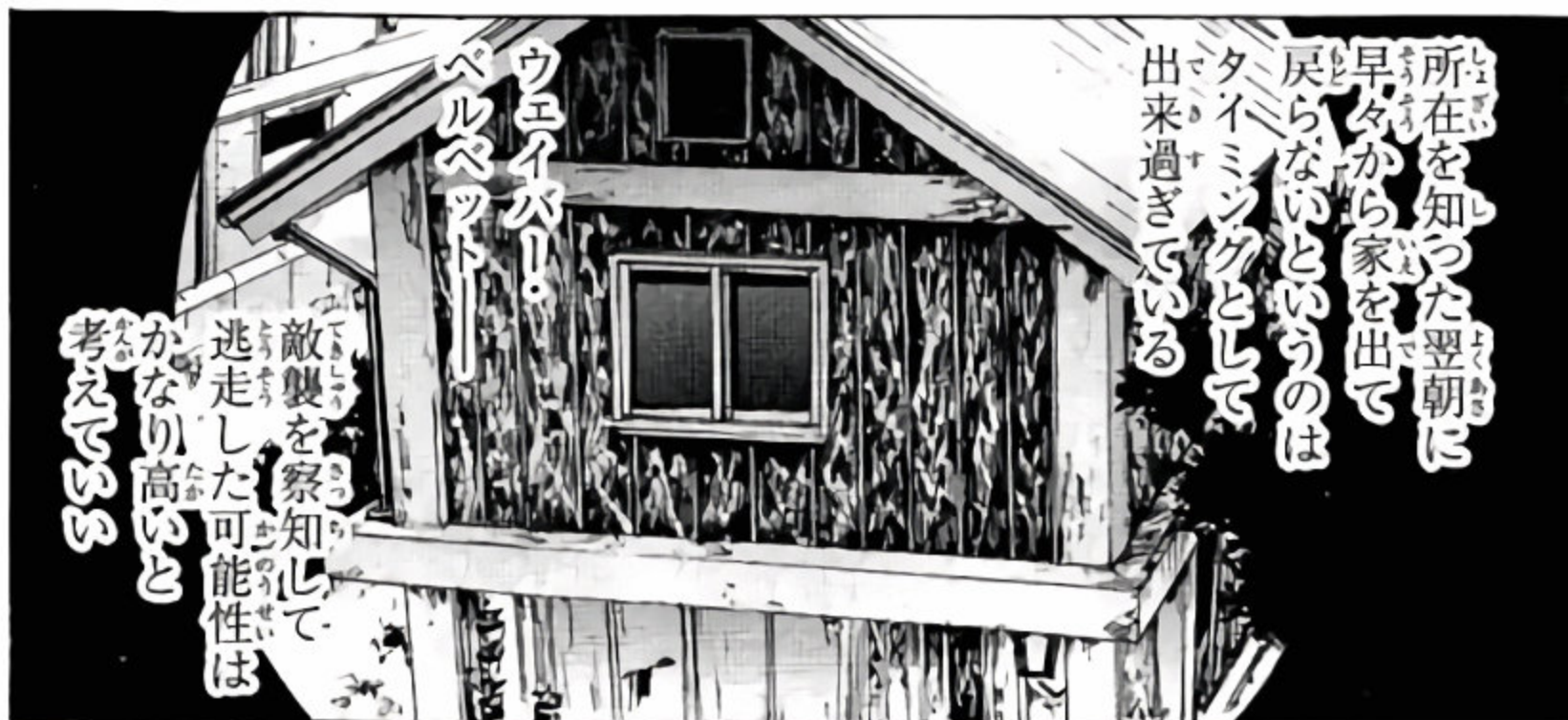
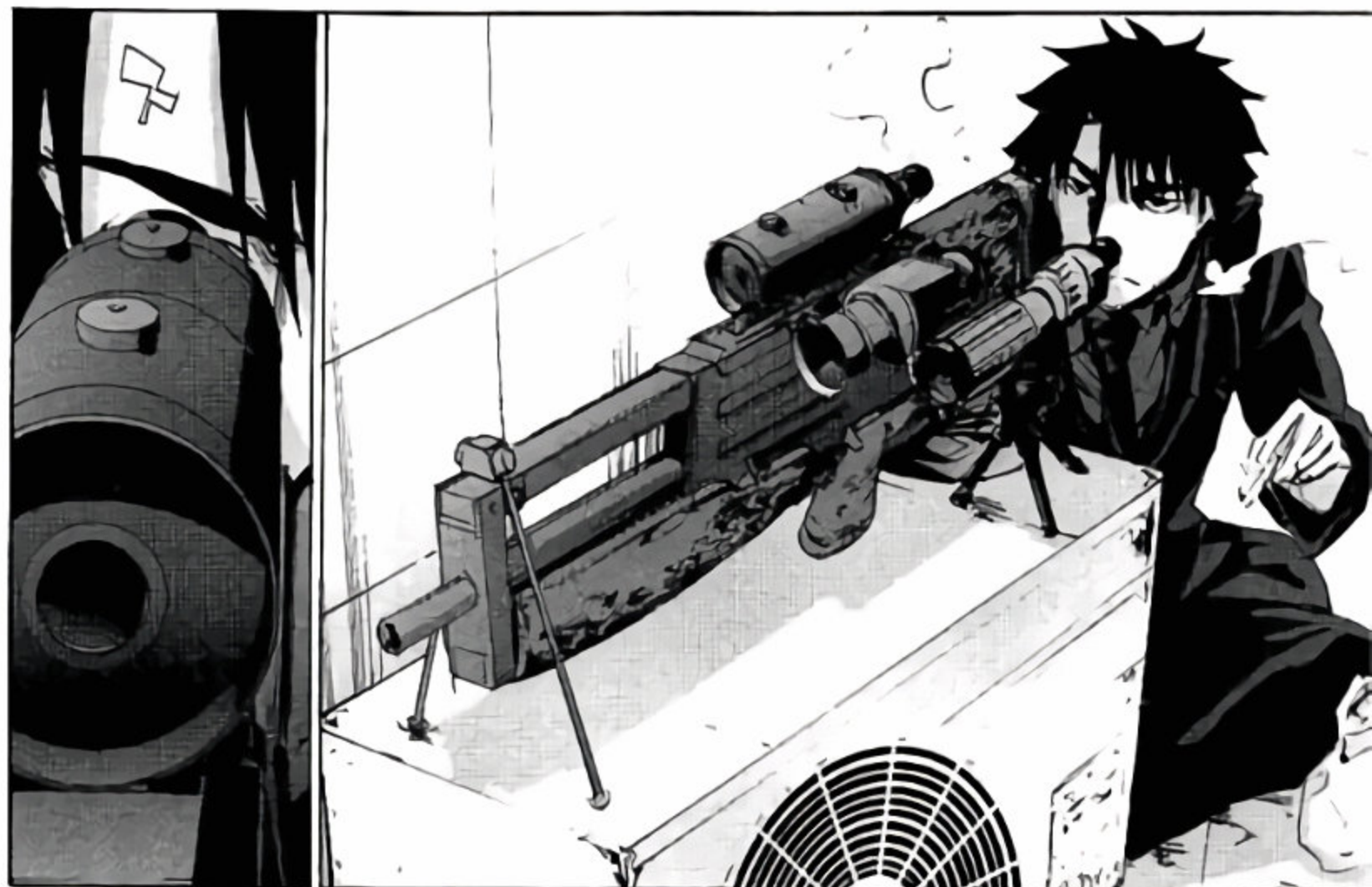
だが征服王の王道の具現たるあの宝具を打破してこそ騎士王の勝利と言える

それを回避して得た聖杯など私は手に取ることはできない

くっ……

衛宮切嗣……

今度はいったいどのような策を弄するつもりだ？





もしウェイパルが再びマフケンシー家に戻るのであれば、時限爆弾で家もろとも吹き飛ばすという手もあるが

既に奴が逃走した後ならば、今頃は別の拠点を見定めているだろう

再びあの家に現れる公算は低い



ただの一般人の家を隠れ蓑として拠点に選ぶとはな

わざわざ解りやすい場所に大仰な工房を構えた御三家や、ケイネスよりも余程賢明な策略だ

そういう判断ができる魔術師が、あの家主に情をかけるなど考えにくい

あの老夫婦を利用して罠に嵌めるといふ策も通用しないだろう

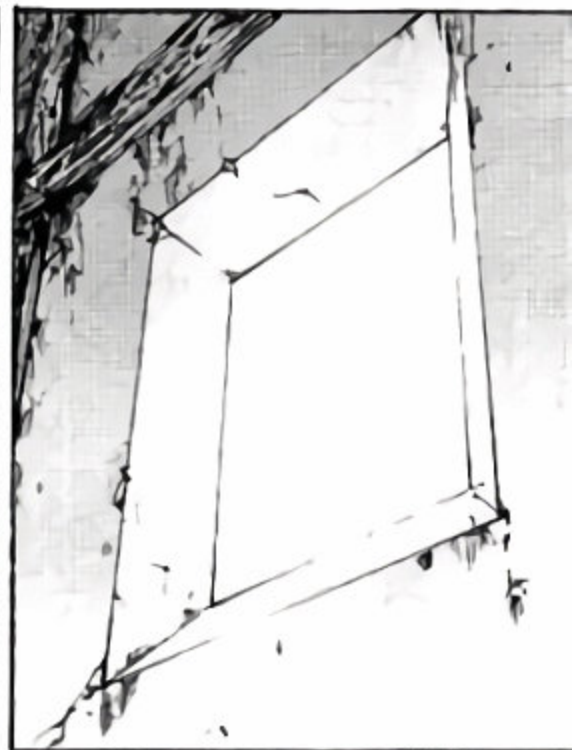
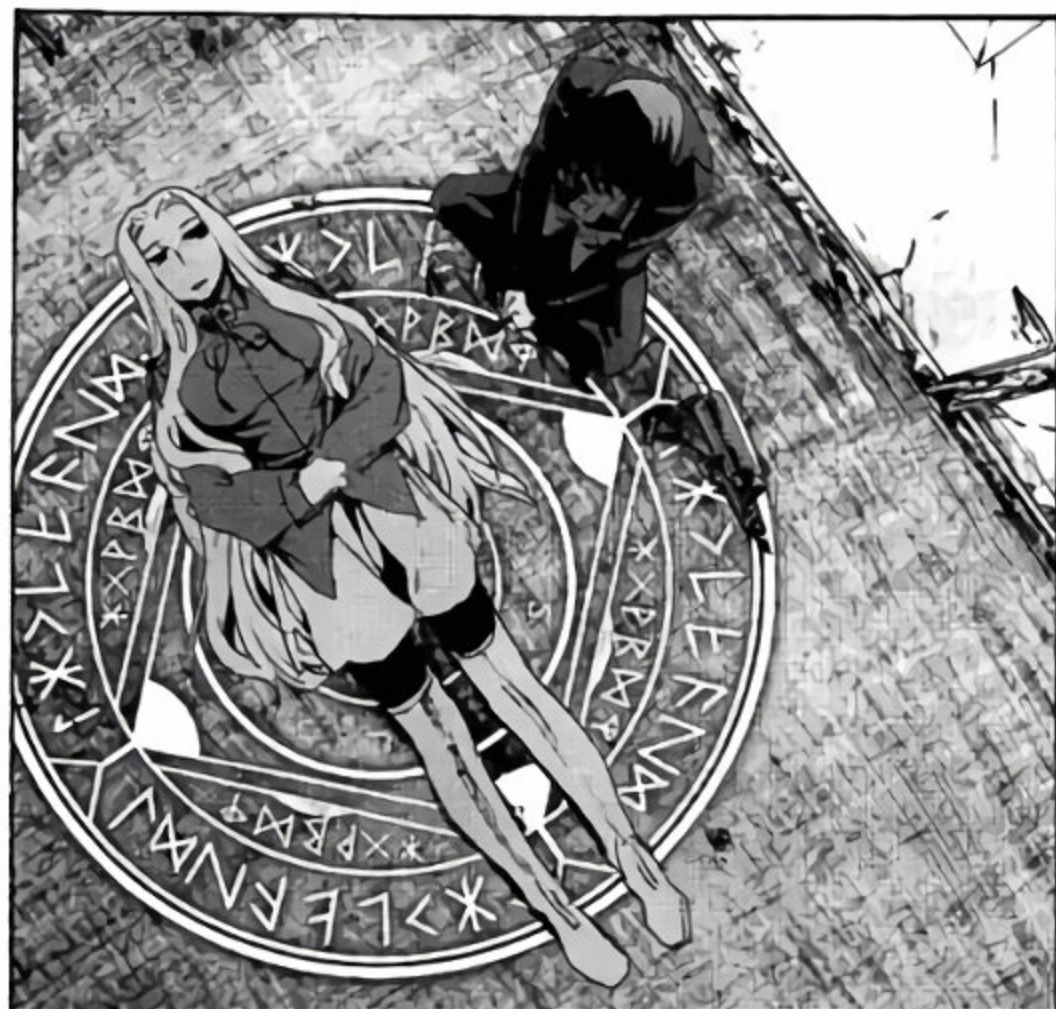


しかし奴の不在が偶然である可能性は捨てきれない……

調べては奴は「突発的偶発」でマスターとつながってしまった見習い魔術師でしかなく

「戦闘において他人同然」と結論するしかなかった

そんな少年魔術師が情報戦で僕をどうやって出し抜いたというのだ?





ねえ
舞弥さん



あなたは
なぜ切嗣の
ために戦うの？

……それ
以外に何も
ないからです




——え？



私には
家族のことも
自分の名前も
思い出せない

久宇舞弥という
名前は切嗣が
最初に作ってくれた
偽造パスポートの
名義です



憶えているのは
そこがどうしようも
なく貧しい国だった
ということだけ

希望もなく
未来もなく

ただお互いに憎み合い
奪い合うことでしか
生きる糧を得られない
場所でした

戦争は決して終わらず
軍隊を維持する資金
さえもないのに
それでも殺し合いを
続けるしかない毎日…



そのうちに
誰か
が
思い
つ
いた
ん
で
す

兵隊を徴用して
訓練するより
子供を攫ってきて
銃を持たせた方が
安上がりで
手っ取り早いとね



だから銃を
渡されるより
以前のことは
憶えてません

そんな風に
先に精神が壊れて
しまったから
その分だけ生命が
長持ちしたんです

敵を狙って
銃爪を引く

そういう機能
だけを残して
あとは全てを
捨て去って……



それが
できなかった子は
できた子たちより
先に死んで
いきました

そして私は
たまたま切嗣と
出会った日まで
生き残れた



私はヒト
としての中身が
死んでいる

それが私の
生命です

ただ外側の器
だけがまだ動いて
昔馴染みの機能を
維持してます

拾ったのは
切嗣だ

だから切嗣が
好きなように
使って
くれればいい



……それが
私がここに
いる理由です

……



マダム

むしろ
私には……

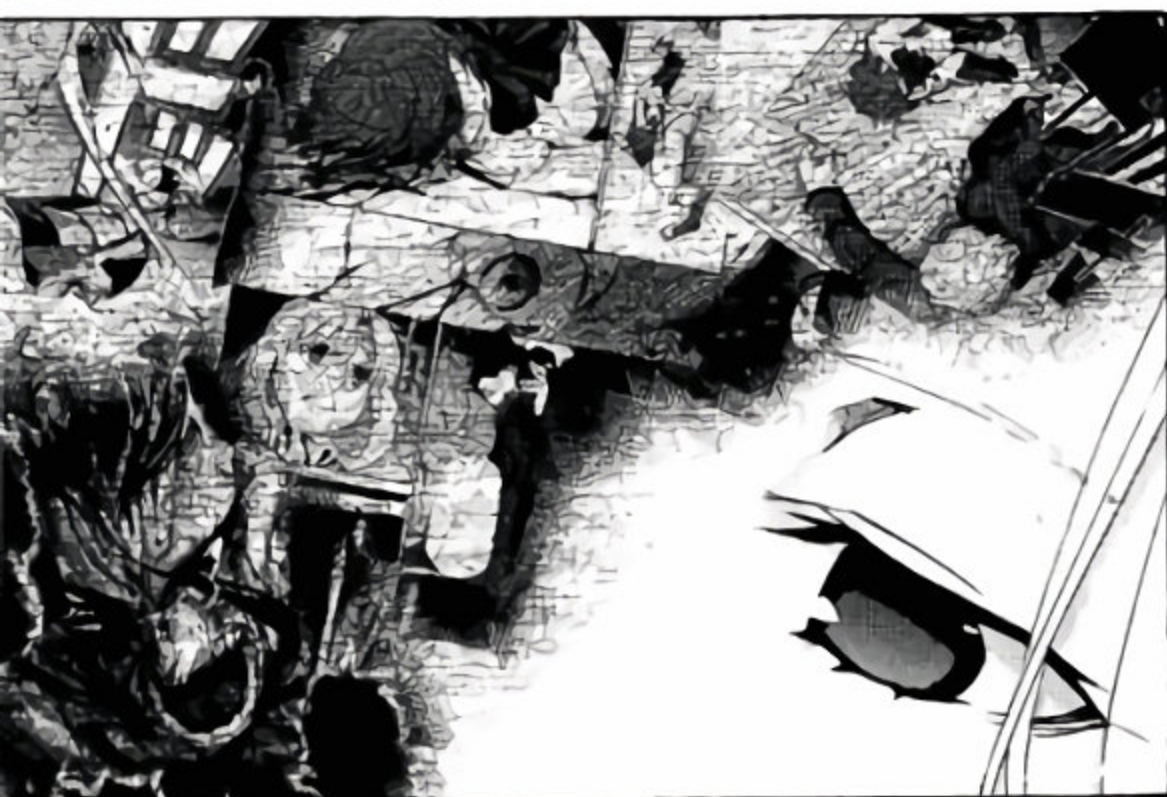
貴女の
熱意こそ
意外だった

え？



貴女は
生まれ育った城に
閉じ込められたまま
外の世界を知らずに
生きてきた

そんな貴女が
世界を変革しよう
という切嗣のために
あれほど必死になって
戦うだなんて……



私は――



――そうね

本当は切嗣の理想が
どういうものか
きちんと理解できて
いるわけではないわ



結局解った風な
ふりをしていただけなのかもね

ただ愛しい人と
共に歩みたいと
思ったただけなのかも

舞弥さんの言う通り
私は切嗣が変えようと
している世界のことを
まるで解ってない

私の中の理想なんて
何もかも切嗣の
受け売りでしかない



ええ

でも切嗣
には内緒



そうなの
ですか？



切嗣には
いつだって
彼が正しいと
言い聞かせてきた

彼の理想には
私が命を捧げる
だけの価値が
あるってね

そうやって
理解者のふりを
してきたわ

同じ理想を懐いて
そのために
死ぬ女なら——

ただ夫のためだけに
死ぬ女よりよほど
切嗣にとっては
重荷にならない
でしょう？

成る程

ではマダム
貴女には
貴女自身の
ための願いは
ないと？

願いは……

いいえ
確かにある

私は切嗣と
セイバーに勝ち
抜いて欲しい

あの二人に
聖杯を掴み
取って欲しい

それは……
第三魔法の
達成という
アインツベルンの
悲願ですか？

私が求めて
いるのは
戦いの終焉よ

切嗣が求める通りに
世界の仕組みが変わり
すべての闘争が
終息するならば――

ここ冬木で聖杯を
求め争う戦いに
についても例外じゃ
ないはずでしょう？

どうか今回の
四度目を最後の
聖杯戦争に
してほしいの

聖杯の器のために
犠牲になる
ホームクルスを
もうこれ以上
増やしたくない

……
ご息女の
こと

ですか？

ええ

大老爺様の計画では
私より以後の
「聖杯の守り手」は
より機能を洗練された
ホームクルスに
なるそうよ

大老爺様は今回の
第四次が
始まるより以前から
第五次の
可能性を見越していた

だから私に
イリヤを
産ませたのよ

ただ胎内に聖杯を
秘め持つのではなく
逆に追加の魔術回路を
さらに外装として
被せることで

もし私と切嗣が
失敗すれば
そのときはあの子が
「天衣」の実験台
として採用される

六〇年後の
真打ちを用意
するためにね

肉体そのものを
聖杯の「器」
として機能
させる構想なの

あの子を抱いて
おっぱいを
あげて……

コレも結局は
「器」の部品
でしかないん
だってこと

でも私には
解ってた

大切な我が子の
ことをそんな風に
諦めなきやならない
母親の気持ち
あなたには解る？

あの子も私の孫も
みんな同じように
娘を産むたびに
この悲しみを
味わうことになる

いつか冬木の
聖杯が降霊される
時が来るまで
この連鎖は
続けられていく

だから私の
この身体だけで
アインツベルンの
妄執を終わらせたい

もしそれが叶えば
私の娘は運命から
解放され最後まで
ヒトとして寿命を
全うできる
ようになる

母親としての
情ですか……

そうなの
かもね

舞弥さん
あなたには
想像もつかない？

——え？

本当なら解って
然るべきなの
でしょうが

これでも一度は
母親になった
身ですから

私にも実は出産の
経験があるんです
意外に思うかも
しれませんが

……結婚の
経験が？

いいえ
父親が誰かも
判らない

戦場では私たち
女の子は全員
兵舎で大人たちに
毎晩輪姦されて
ましたから



幾つ（いくつ）の頃（とき）だったか
……ともかく
初潮（しよしやう）がきて
すぐでした

子供（こども）には名前（なまえ）も
つけてあげ
られなかった

そんな……

今（いま）では
生きて（い）るか
どうか
判（わか）らない

もし死（し）んでい
なかったと
したら
きつとまだ戦（いく）場（ば）で
殺（ころ）し合（あ）いを続（つ）けて
いる（い）るでし
ょう

キャン（かん）プ（ぷ）では五（ご）歳（さい）に
な（な）った子（こ）供（ご）には銃（じゆう）が
渡（わた）されてま
したから



驚（おどろ）かれ
まし（ま）したか？

でもこ（こ）んな話（わ）
今（いま）ではも
う珍（めづ）しくも
ない（ない）ん
です

最近（さいきん）は世（よ）界（かい）中（ちゆう）の
ゲリ（ゲ）ラ（ラ）た（た）ち（ち）が
兵（へい）士（し）に子（こ）供（ご）を
使（つか）う
費（ひ）用（よう）対（たい）効（けう）果（くわ）を
知（し）っ（つ）て（て）ま（ま）す

私（わたし）のよ（よ）うな経（けい）験（けん）を
する子（こ）供（ご）た（た）ち（ち）は
減（へ）るど（ど）ころ（ころ）か
むし（む）しろ鰻（うなぎ）登（のぼ）り（り）に
増（ま）えて（て）る（る）ん（ん）です



マ（マ）ダ（ダ）ム

貴（あなた）女（によ）は初（は）めて（て）見（み）た
世（よ）界（かい）を美（うつく）しいと感（かん）じて
そ（そ）こ（こ）に生（い）きる人（ひと）々（々）を
幸（さい）せ（せ）だ（だ）と（と）思（おも）っ（つ）た（た）の
か（か）も（も）し（し）れ（れ）な（な）い

でも私（わたし）に言（い）わ（わ）せ（せ）れ（れ）ば
あ（あ）の（の）冬（ふゆ）の（の）城（しろ）か（か）ら
一（いっ）歩（ぽ）も出（で）な（な）い（い）で
暮（く）ら（ら）し（し）て（て）い（い）た（た）貴（あなた）女（によ）の
方（かた）こそ羨（うらやま）ま（ま）し（し）か（か）つ（つ）た

こ（こ）の（の）世（よ）界（かい）の醜（みにく）さ（さ）も
お（お）ぞ（ぞ）ま（ま）し（し）さ（さ）も
何（なに）ひ（ひ）と（と）つ（つ）見（み）る（る）こ（こ）と
な（な）く（く）済（す）んだ（だ）ん（ん）て

こんな世界を
もし本当に違う
形に変えてしまう
ことができる
なら……

それを為し遂げる
切嗣になら
この命はどう
使い捨てられよう
とも構わない



あなた
は……

切嗣が
理想を
遂げた後

どうする
つもり？

もし仮に命を
繋いだとしても
もう私に生きる
意味はない

——生き残る
などと考えては
いません

切嗣によって
変革された世界
というのは
きつとそういう
場所でしょう



捜さないとい

それは忘れ
去られていい
ことじゃない

はっきりと確かめて
刻みつけていかなきゃ
ならないことよ

あなたの本当の
名前と家族

それにあなたの
子供の消息を



そんな
ことはない

あなたには
果たさなきゃ
ならない
ことがある



.....



そうで
しょうか.....

もし真に平和な
時代が来るなら
私のような人間の
記憶は悪夢で
しかない

塞がった
傷を徒に開き
痛みをもたらず
だけだ

せっかくの理想郷に
憎しみの種を
持ち込むだけでは？

違うわ

だってあなたの
人生は夢じゃない
歴とした事実
なんだから

それを闇に葬った
上での平和なんて
それこそ罪深い
欺瞞でしかないわ

私
思うの

もし二度と痛みを
生まずに済む場所まで
辿り着いたなら
そのとき人間は――

過去に置き去りに
してきた痛みや犠牲を
本当の意味で悼んで
偲ぶことが
できるようになるん
じゃないかしら

本当に平和な
世界っていうのは
ただ痛みを忘れて
いられる場所
なんかじゃない



.....



その言葉は
もつと早くに
切嗣にかけて
あげるべきでした

もしかしたら
彼は今よりずっと
救われていた
かもしれない

—それなら
舞弥さん

あなたが彼に
伝えてあげて
私の言葉で
慰めてあげて

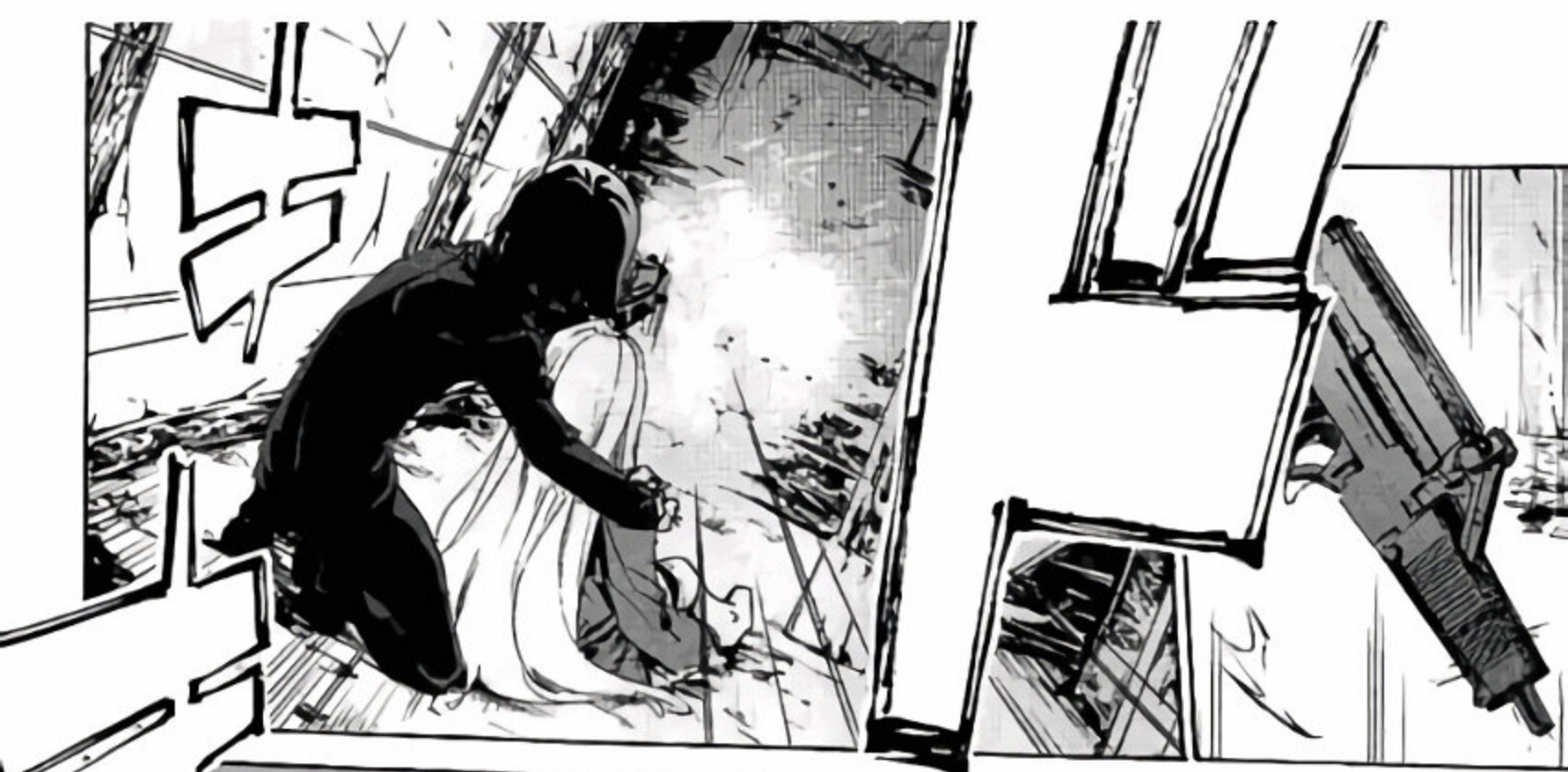
善処は
します

でもそれは
戦いが終わった
後の話です

現状は予断を
許さない
彼も私も当面は
気を抜くことなど
できません

本当に
あなたって
人は





誰かがこの
土蔵の扉を
殴りつけている

この怪力——
サーヴァント!?



誰が一体
どうやって
この土蔵を!

使い魔による斥候
魔術による
探知であれば
防御結界で
それと知れたはず



そんな前置き抜きに
サーヴァントを投入
してきたのだとしたら
敵は予めこの土蔵の
ことを知っていた
としか思えない!





.....ツッ!



呪的処置を施して
皮下に埋め込んだ
舞弥の毛髪が.....

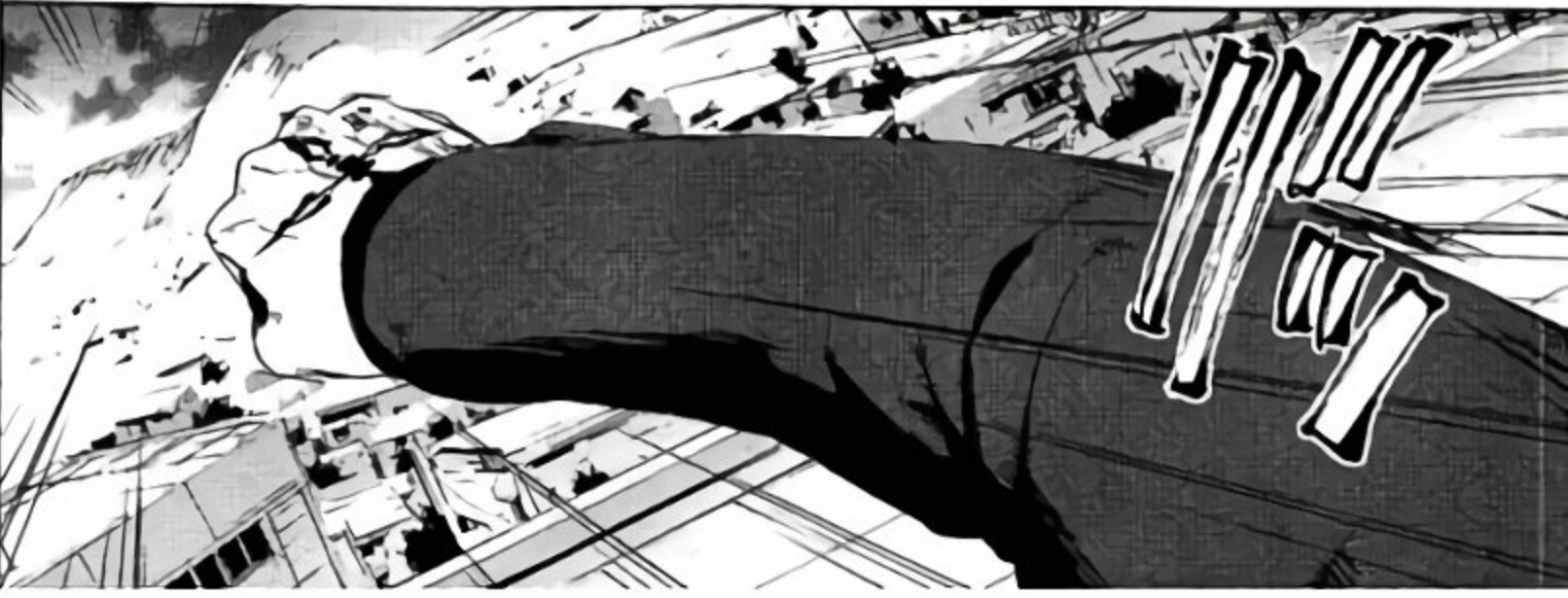
ブキ

ブキ

これは舞弥が死に
直面するほどに
生命力が衰えた
ということだ!



無線や使い魔で
窮状を伝える
暇すらなかった
ということとは.....











セイ……
パー……？

マイヤ
しっかり！

今すぐ
手当てをします
大丈夫だから

！



ライダーが!!



ライダーが……

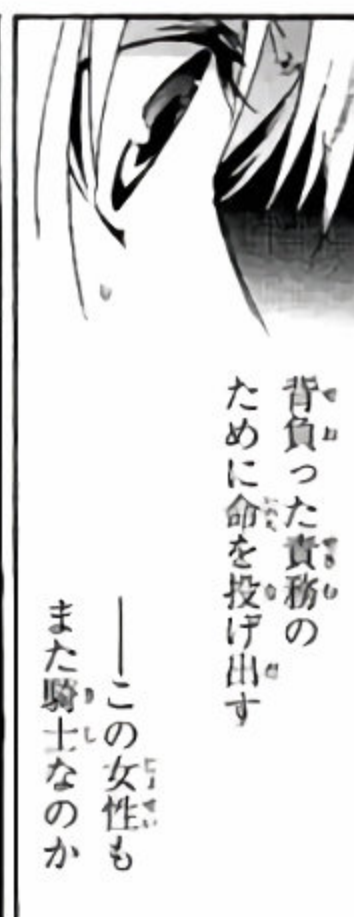
マダム……を……



……私は
だいじょう
ぶ……

すぐに……
切嗣が……

……だから……
早く……



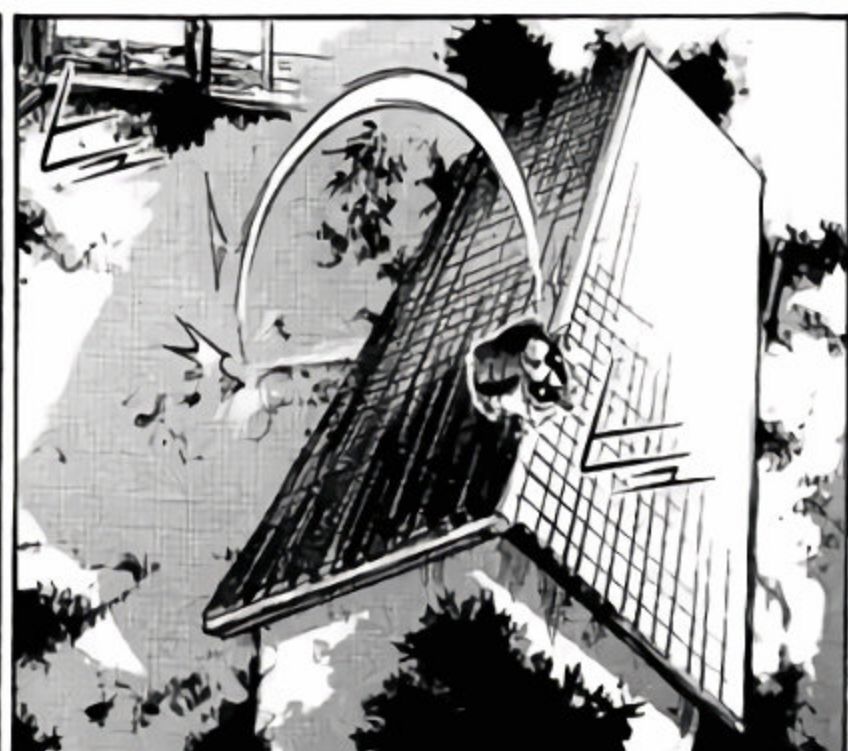
背負った責務の
ために命を投げ出す

——この女性も
また騎士なのか



早く……外へ……
追って……くだ
さい……

だが
それでは——





くっ……

「神威の車輪」
で逃走されたら
私の足では
追いつけない!



だが



逃がすものか!!

Fate 
フェイト/ゼロ

In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just cold despair and a sin called victory,
built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,
it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,
it is best to end them in the best efficiency
and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

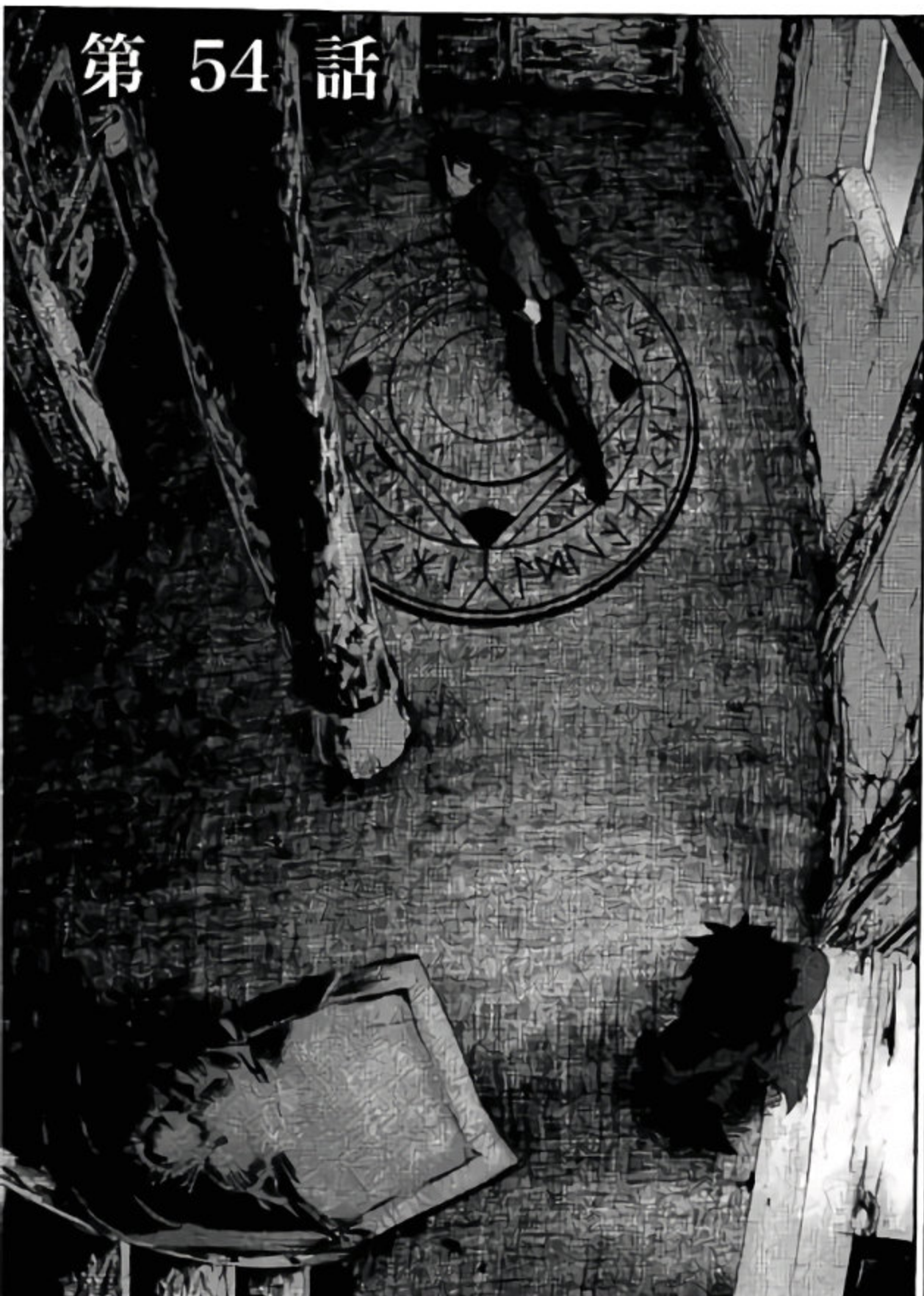
Justice cannot save the world. It is useless.





—36:48:13

第 54 話





一年前
僕はその言葉を
受け入れた



私は人として
生きることに
もう何の価値も
喜びも感じません

だから
拾われた命は
拾ったあなたに
渡します

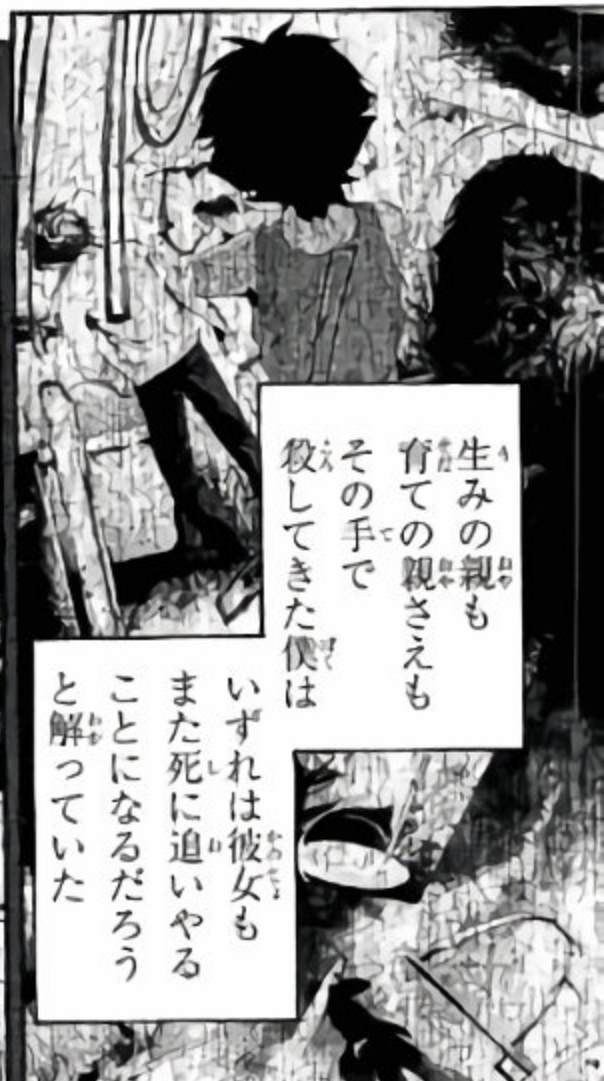
とれ 遠からずこの少女は死ぬ



だが彼女一人を
使い捨てることで
より多くの命を
救えるならば

むしろ
望ましい結末
だろうと考えた

そして道具として
仕立てあげ
使ってきた



生みの親も
育ての親さえも
その手で
殺してきた僕は

いずれは彼女も
また死に追いやる
ことになるだろう
と解っていた

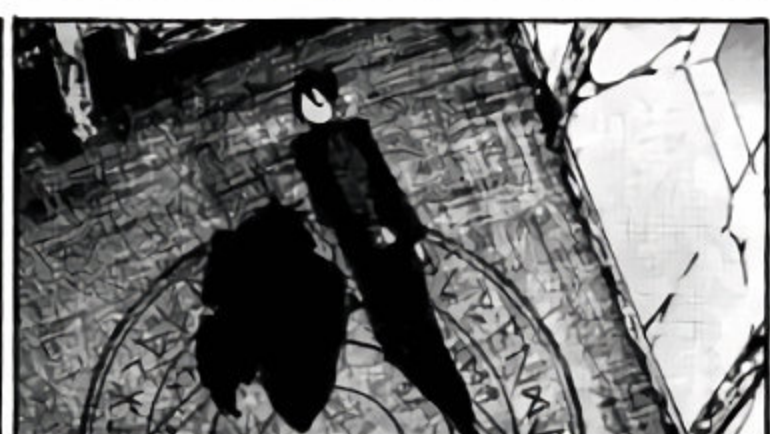


だから
悲しみもない

喪失感も
ありえない

それが道理だ

当然の帰結だ



「お前は
ここで死ぬ」

——そう
言って
やればいい

もう任務も
役目もないと

何も思い煩う
必要はないと

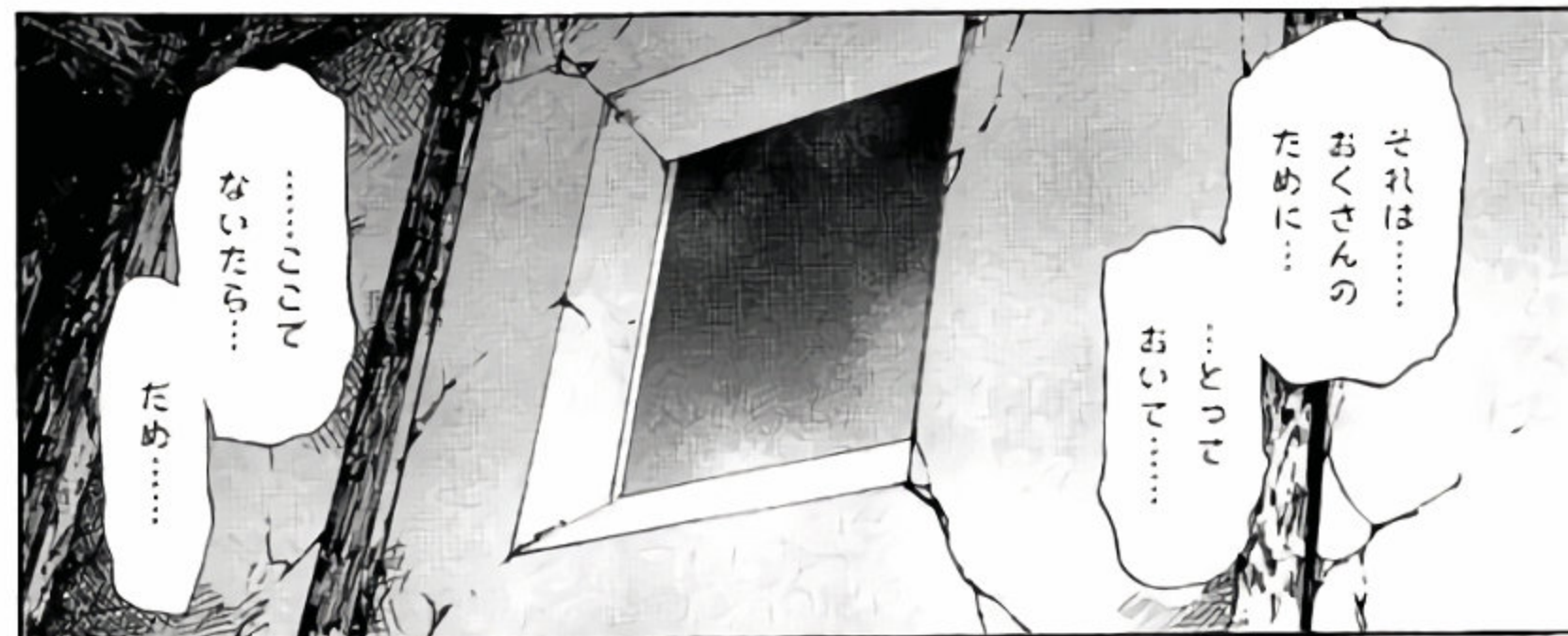


「お前は道具
なのだから——」



……ためだよ

ないたら……



……どうして
ないたら……

ため……

それは……
おくさんの
ために……

……どうして
おくさん……



あなた…

よわい
から…

いまは
まだ…

こわれちゃ…
だめ…



こんな自分に今
こんな言葉を
かけられる女なら

彼女にはもつと
違う生き方が

死に様があった
はずじゃ…



舞弥が僕と同じ

自分の命を道具
として使い捨て
結果次第でそれを
良しとできる
人間であると

何故そんな
勝手な見立てを
今日まで信じて
いられた？



僕は—

僕は何かを

致命的に間違えた



けさ…
やじょう……

こんな
こと……

申れたら…
ため……

むかしの
ママの…
キラツブに…

なったん
だから……



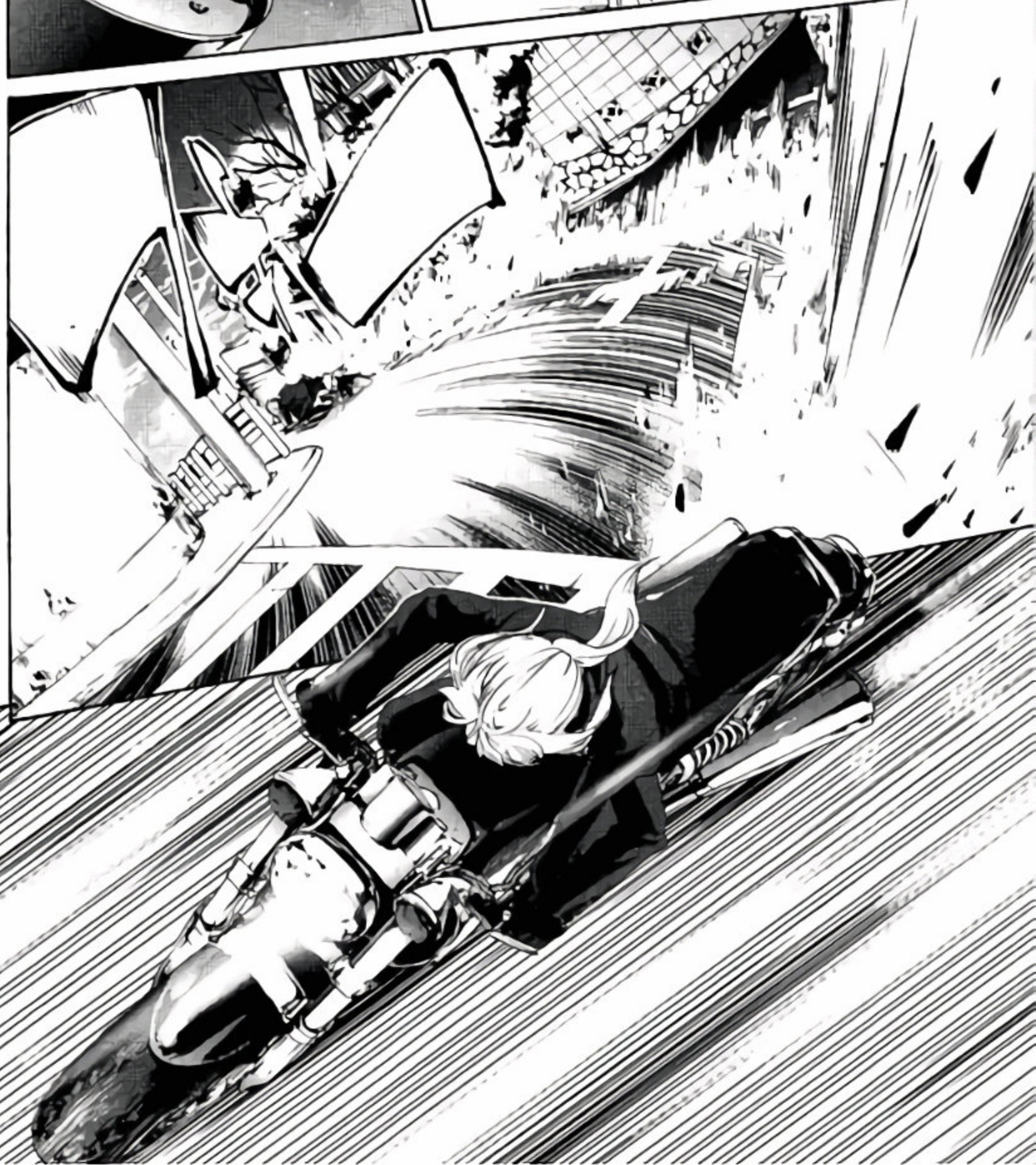
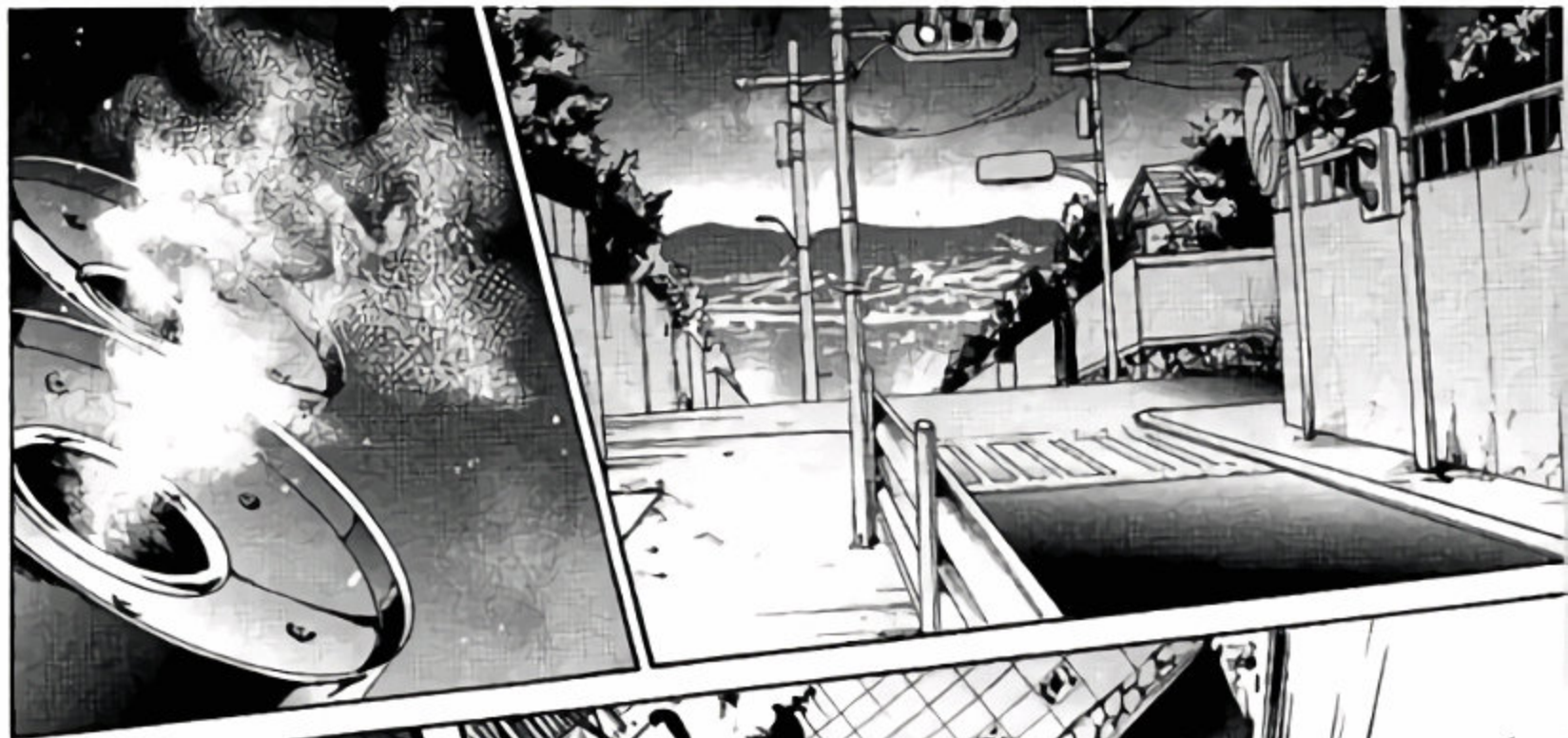
舞^{まい}弥^やお前^{まえ}の
役^{やく}目^めは……

……
終^{しま}わりだ

……
安^{やす}心^{しん}しろ
舞^{まい}弥^や

後^{あと}は
セイバーに
任^{まか}せろ





なんと
加速……

私の機動力を最大限に
引き出すために改造を
加えたと聞いていたが
これは人の身では
とても扱いきれ
ないだろう

なるほど
これの真価を完全に
発揮させてやることは
人外の魔である
サーヴァントにしか
適うまい

ライターは
アイリスファイルを
抱えての移動では
霊体化できない

ならば
「神威の車輪」で
距離を引き離す
はずだが

モッ

いた!

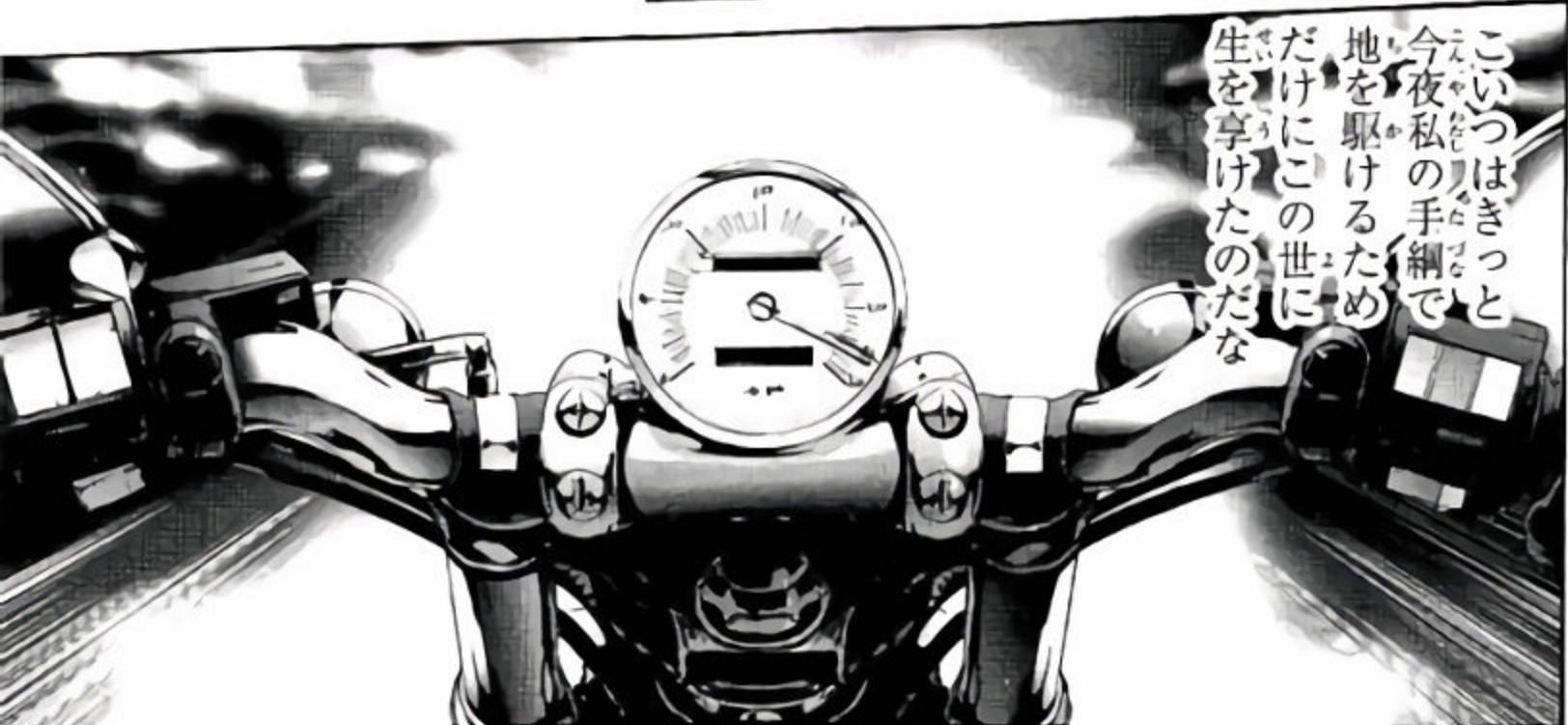
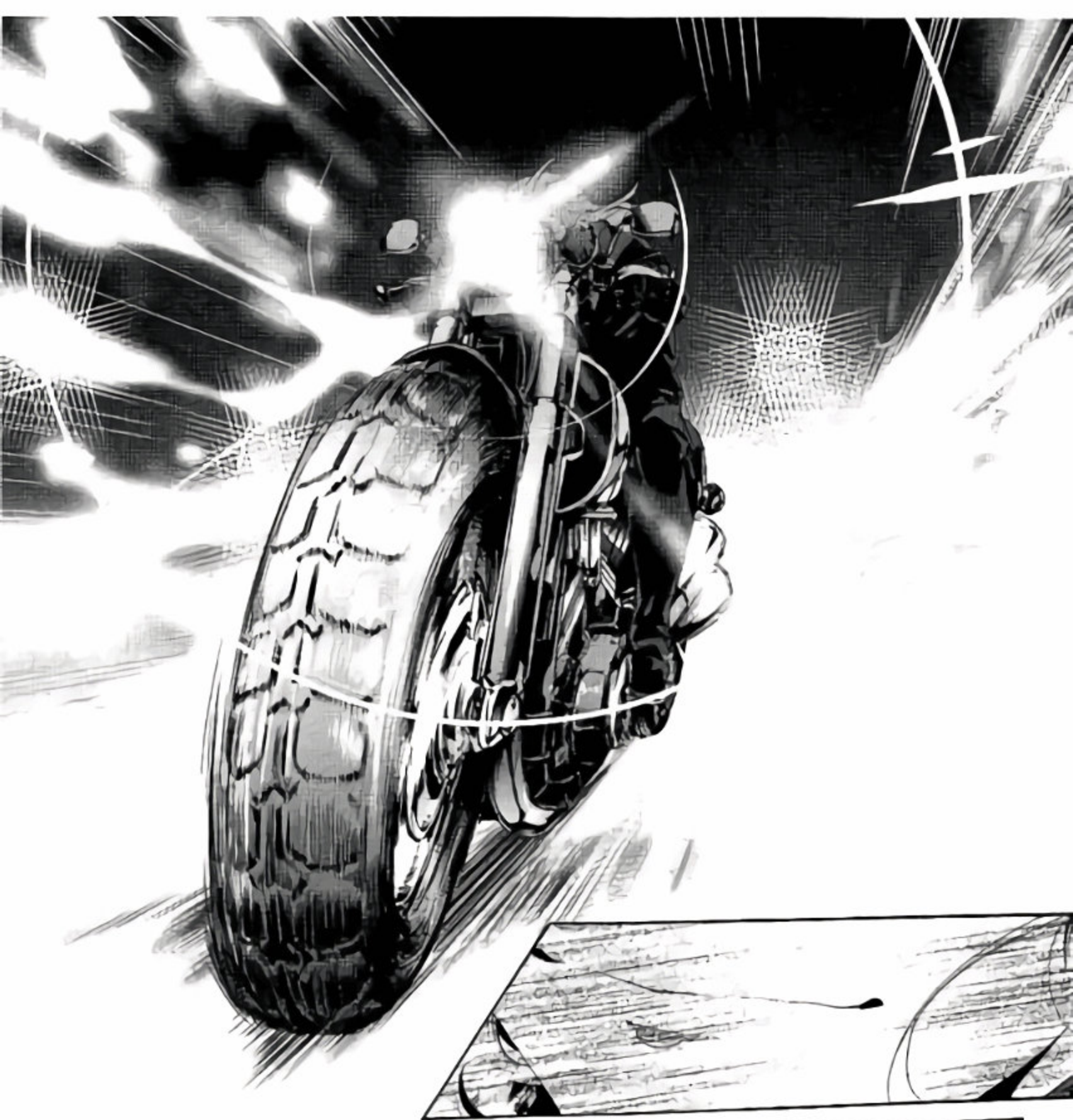
方角は西

新都を抜けて
冬木市の外にまで
逃げ延びる暇か

ならば
むしろ俺俤

そういうことなら
こちらも道幅の広い
国道を使つて
この加速力を
存分に發揮できる

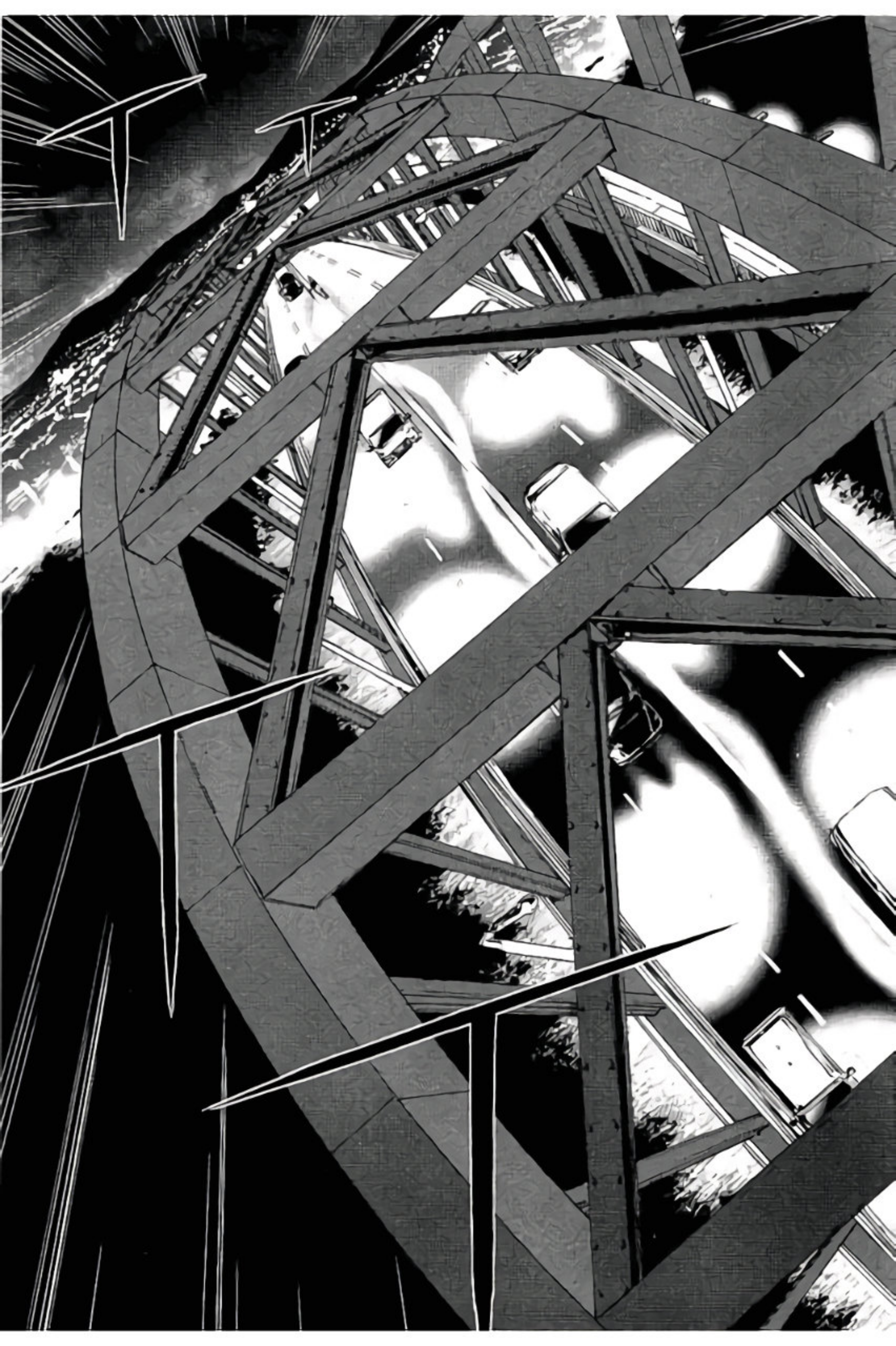


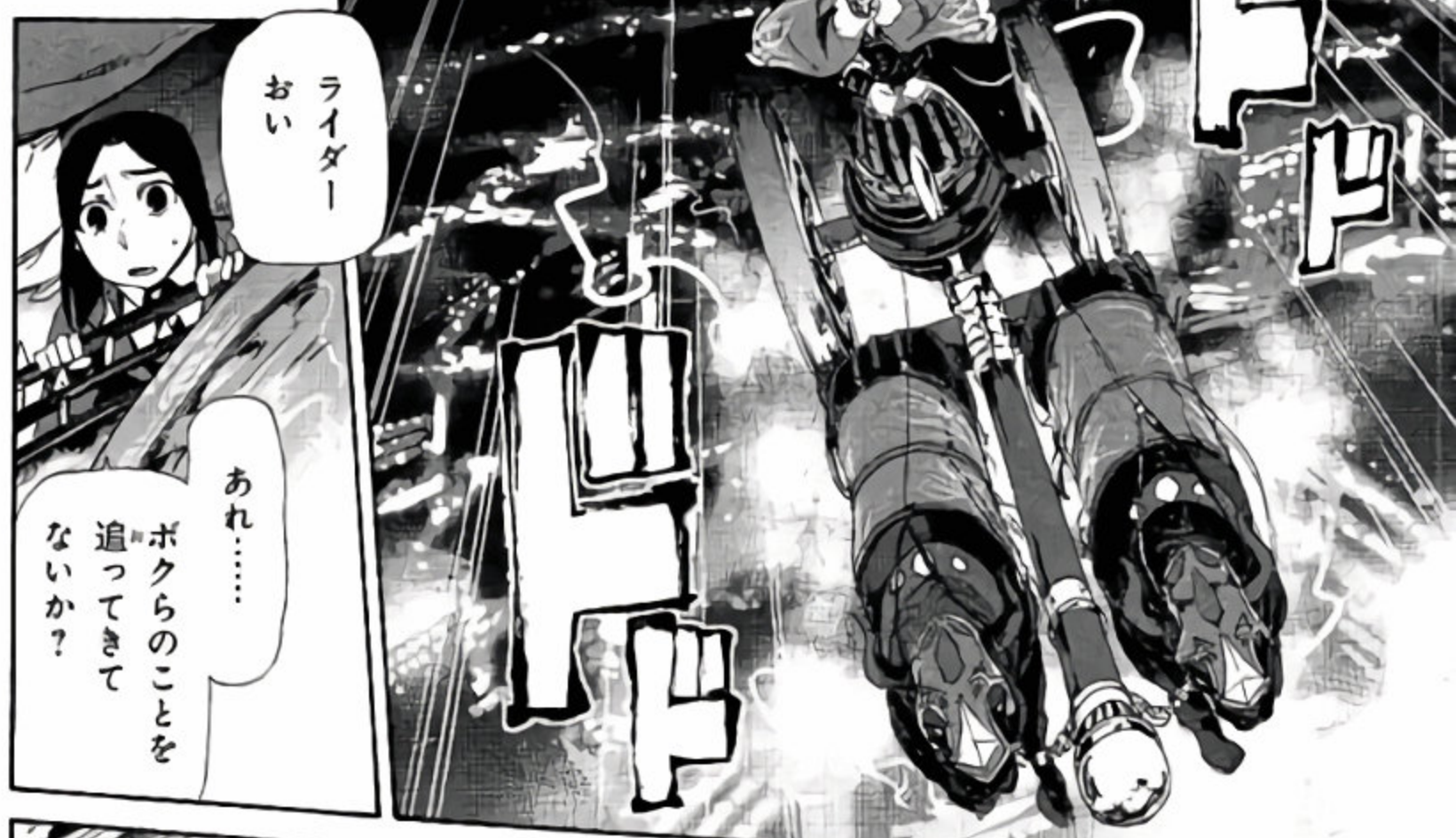




いいだらろう！

燃え尽きるまで
駆つてやる！





ライダー
おい

あれ……

ボクらのことを
追ってきて
ないか？



うん？

エエ

ほお？
誰かと思えば
セイバーか

こりや
捜す手間が
省けたわ



バイク？
あれが？

お前と違って
この距離じゃ
見えないよ

いやそんな
無茶な……

……つうか
なあ坊主

オートバイという
乗り物はあんなにも
速いものなのか？

でもたしかに
セイバーのクラスなら
それなりの騎乗スキルが
顕現するだろうし

そう考えれば
有り得るのか
……なあ……？

ほオ

よりにもよって
「騎兵」として
余に挑んできたか

フフン
面白いわ

これでもう
あのけったいな
森の城まで出向く
必要もなくなった
が……

そういうことなら
余の方も相応の
趣向で臨んで
やらんとなア

お……降りる
のかよ!?

気が
変わった

あの小娘とは
尋常に「車輪」で
勝負を決めてやる

修平

いや待て

あの「約束された
勝利の剣」は
むしろ距離が
離れている状態
こそ危ない

敵の宝具の破壊力が
逆に仇となるような
接近戦を挑む方が
手堅いのは確かだ

この先の森を
抜けていくのに
それなりに長い
幅のある道が
続いておったよな

フフフ
誂え向きの
戦場だ！

むむむむ
敵の土俵に
……

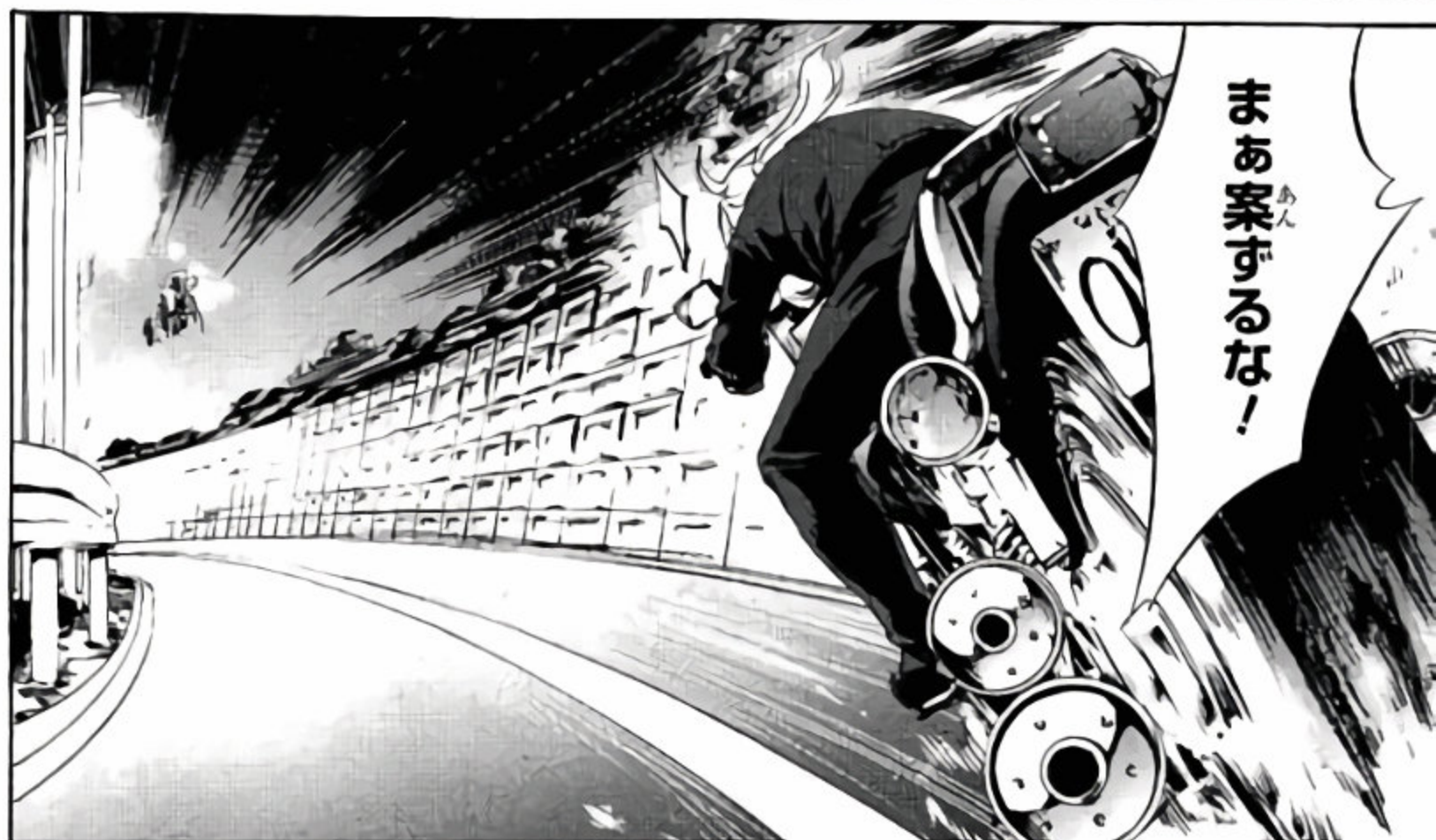
ハツハツハ！

坊主もようやく
闘争の妙味って
モンが
解ってきたか

よし
それで
いい

いいけど
慎重に
やれよな
オマエ！

まあ案ずるな！





天にも地にも
我が疾走を
阻むものはない！

—36:45:26



実に
都合な
好都合な
展開だ

よもや本物の
ライダーが
現れるとは
な……

間桐雁夜

ポ!

君は戦場において常に幸運を味方につけるな

神父……

こんな小細工に本当に令呪を二つも費やすだけの意味があったのか？

案ずる必要はない

私に協力する限り君は惜しむことなく令呪を浪費して構わない

さあ手を出したまえ





……もういいぞ
バーサーカー

変身能力
とはな……

つくづく
バーサーカーの
クラスには惜しい
宝具を持っている

もともとこいつは
他人を装って
武勇を立てた逸話を
幾つも持ってる
英霊だからな

狂化したせいで
ただの「偽装」の能力
にまで劣化している上に
令呪無しには使うこと
すらできなくなった



余程セイバーに
執着が
あるようだな

カサ...

おかげで命令を
実行させるために
もう一つ令呪を
使う必要があった



罫が明かな
魔力供給を
切りたまえ



この女が本当に
「聖杯の器」
なのか？

正しくはこの
人形の「中身」
が—だがな

あと一人か二人の
サーヴァントが
脱落すれば正体を
現すことだろう



.....



聖杯を降ろす
儀式の準備は
こちらで
引き受ける

ガッ

その間
この女の身柄は
私が預かるう



心配するな

二十

聖杯は約束通り
君に譲り渡す

二十



私には
願望など
求める理由が
ないのでね

それ以前に
もうひとつ

あんたは俺に
約束した
はずだ 神父



ああ
その件か
問題
ないとも

今夜零時に
教会を
訪れるがいい

そこで遠坂時臣と
対面できるよう
既に段取りは
整えてある

この神父……
一体何を
企んでいる？

私の父——
言峰璃正の死は
遠坂に責任がある

私は息子として
父の仇を討つべく
間桐の手を借りて
時臣を処断したい

同盟の見返りに
父から継いだ
預託令呪の譲渡

さらに
聖杯戦争に
勝利した暁には
聖杯を間桐に
託そう

言峰綺礼——

疑わしいのは
重々承知でも
提示した条件は
旨味がある

時臣を手にかける
算段だけでなく
「聖杯の器」たる
アインツベルンの
潜伏場所を調べ上げ

さらに監督役の
保管令呪さえ
密かに継承している

この男は聖杯戦争の
後半戦における
切札をすべて手中に
しているも同然

制御できない
ババァサーカスを抱え
身内でさえ信用
できない状況で
こいつの助けは
何より心強い

だがこいつの
緊張感がひどく
薄いのは何故だ

こいつの笑みが
子供が遊んでいる
時の表情に
見えて仕方がない

こいつはこの
共闘している状況を
ただ々愉しんでいる
だけなんじゃないか？



忘れるなよ
雁夜

今夜零時だ

そこで君の
悲願は
成就する



二人揃って
人目に付く
のはまずい

まずは雁夜
君が先に戻れ

……
あんたは？

まだこの場で
済ませるべき
用件が残って
いるのでね





今おぬしと
組んでいる
小童の身内でな

間桐

風視……
か？

左様

ワシの名を
知っておるとは
遠坂の小伴も
弟子の躰が行き
届いておるな

……

間桐臟硯

表向きにこそ隠居を
表明しているものの
魔導の秘術で
人ならざる
延命を繰り返し

数代を重ねて
間桐家を支配し
続けてきた
極めつけの怪人

ある意味では
マスターである
雁夜より
危険度において
敵段勝る要注意人物

言峰綺礼

あの堅物の
璃正めの息子と
聞くが相違
ないかの？

いかにも
そうだが

ふむ—
意外よのオ

まさかあの男の
胤からこんな
曲者が育つとは

用件は
何だ？

雁夜の味方で
あるはずのお前が
なぜそんな場所に
忍んで覗き見を？

なに雁夜めが
どのような
助勢を得たか

この目で直々に
見届けてやりたく
なったのでな

雁夜に取り入る
上でおぬしが
並べた口上は
余さずワシの耳
にも入っておる

何でもおぬしも
遠坂の小倅を
亡き者にしようと
企んどうるそうだが



賢しく立ち振る舞いすぎたの

おぬし遠坂の目を盗んで動いているにしては大胆すぎる

そもそも時臣を亡き者にしようと思いついた時点で

おぬしなら雁夜の手だてなど借りることなく十全に事を成し果せたはずじゃ



その通り

あの男は我が父を

よせよせ二度も繰り返して戯言を聞かすでない



……そこまで私を疑うならばなぜ雁夜に忠告しない？



おぬしの狙いは遠坂の小倅などではなく雁夜自身じゃろう

違うか？

そうさのお

まあ他愛もない
好奇心——と
いったところか

おぬしがどういう
手練手管で雁夜めを
壊すのか
ワシにも興味
が尽きぬでなあ

…間桐のために
戦う雁夜の
勝機をみすみす
潰している
というのか？

雁夜の？

勝機
じゃと？

カカカ！
そんなものは
最初から皆無も
同然じゃわい

あんなクズめが聖杯に
到るといふのなら
それこそ過去三度の
殺し合いが茶番に
墮するというものじゃ

解せぬ話だ

間桐は
聖杯を悲願する
御三家の一角
ではなかったか？

フン

ワシに言わせれば
遠坂の小倅や
アインツベルンの
連中こそ
馬鹿の極みじや

実際 蓋を
開けてみれば
キヤスターが
あのザマじや

明らかに
英霊とは程遠い
悪霊なんぞを
招きおった

前回の大番狂わせを
考慮すれば
此度の四度目が
おかしくなると
警戒するのは当然
ワシは最初から
今回は様子見に
徹すると決めていた

聖杯戦争の
システムは
間違いない何か
狂いはじめておる

まずはその正体を
突き止めること
こそ肝要でな

では何の
ための雁夜と
バーサーカーだ？

ただ傍観する
つもりだったなら
なぜサーヴァントを
用意した？

いやなに

せっかく
六〇年に一度の
祭りじやからな

小童どもの
戯れを遠目に
眺めているだけと
いうのも味気ない

ワシとて
ワシなりの
愉しみが
欲しくもなる

勿論万が一にも
あの出来損ないが
聖杯を掴み取って
くるならば
それに越した結末は
ないんじやが――

とはいえワシは
どうにも堪え性が
なくてのオ

閻魔の勝利を
祈願したい
気持ちもあれば

雁夜の無様な
末路を見届ける
誘惑にも抗い難い

裏切り者の
雁夜めが悶え
苦しむ様は
本当に――

ああ！
見ている
飽きぬ

クク
まったく
迷い処よのう

貴様は……
肉親の苦悩が
そこまで見ていて
愉しいか？

おお
心外よな

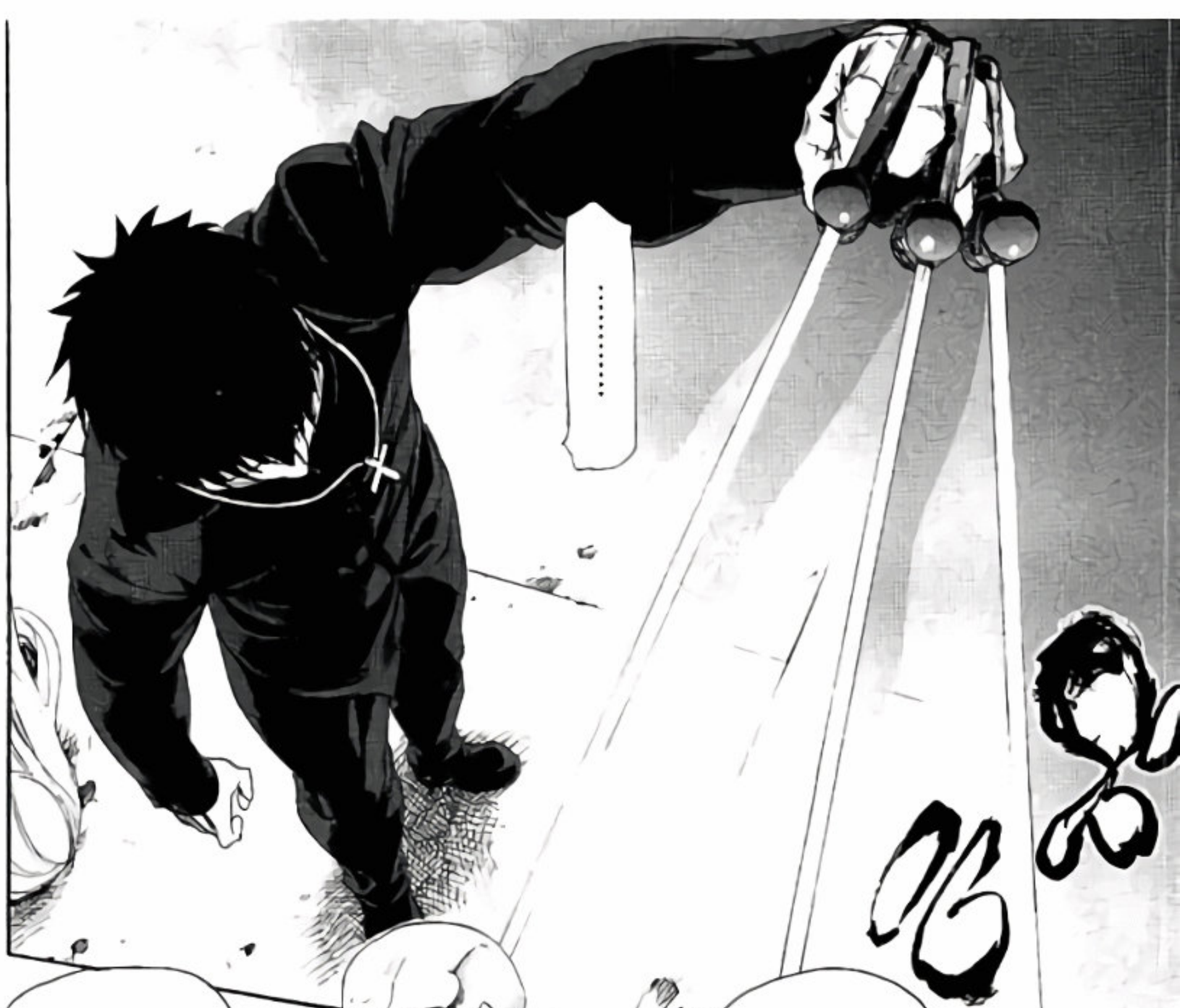
むしろおぬしは
ワシの喜びを理解
してくれるものと
思ったのだが

なに？

ワシはこう
見えても
鼻が利く

言峰綺礼
おぬしからは
ワシと同類の
匂いがするぞ

雁夜という
腐肉の旨味に
釣られて遣い
寄つてきた
蛆虫の匂いがな



…ほほう？
いささか
買い被り
すぎたかの

てつきり
同好の士を
得たものと
ばかり思っ
ていたが



どうやらおぬし
自身の外道ぶりに
まだ照れを
残しておるのか

カカ
青いのう

自慰の如き
秘め事にも
耽っている気
でおったのか



ククク
またいすれ
見えようぞ
若造

次に会うとき
まてにはワシと
五分に渡し合えるよう
己の本性を充分に肥え
太らせておくがいい

クカカカカッ……

第 55 話

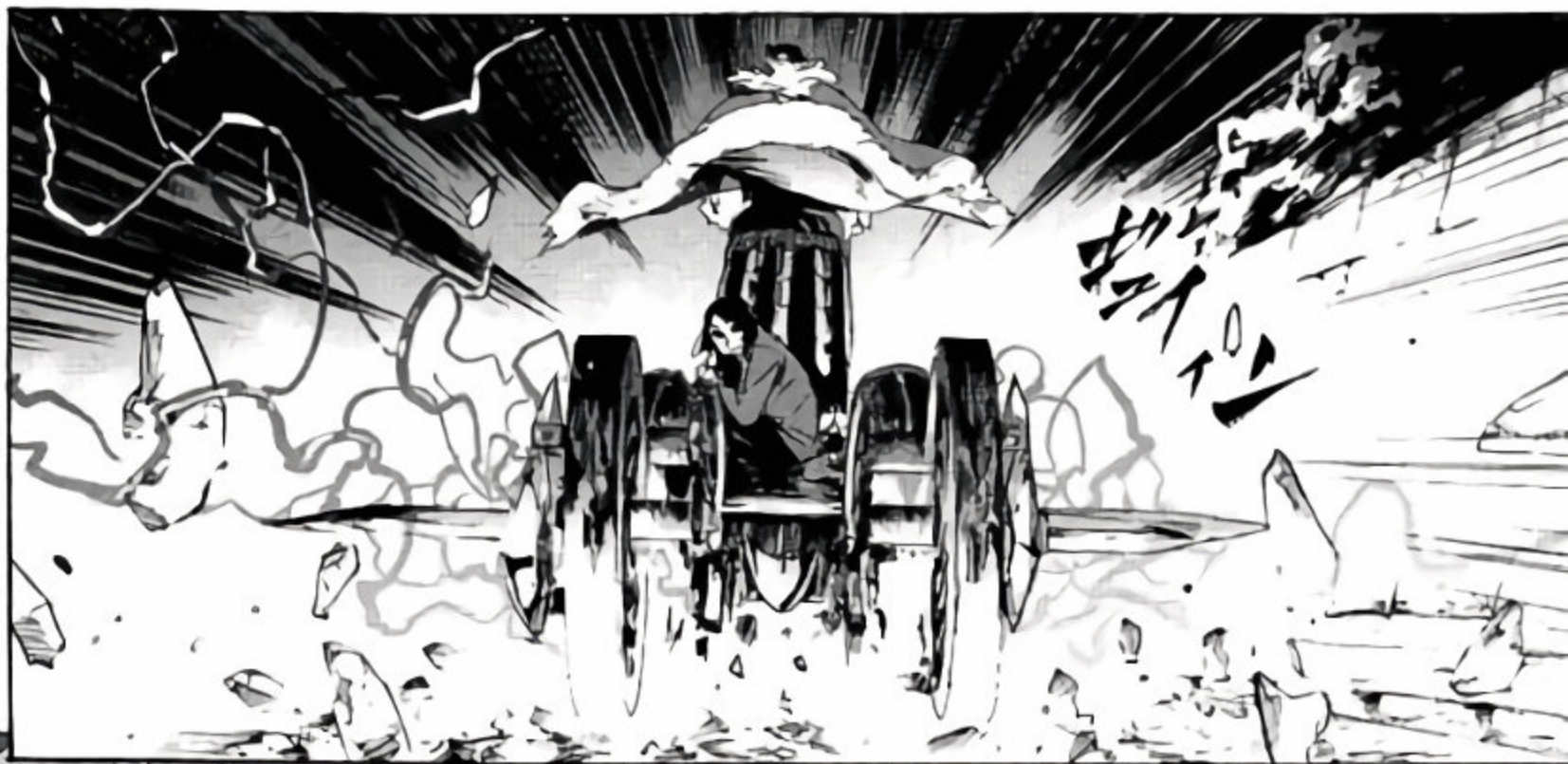
何のつもりだ？

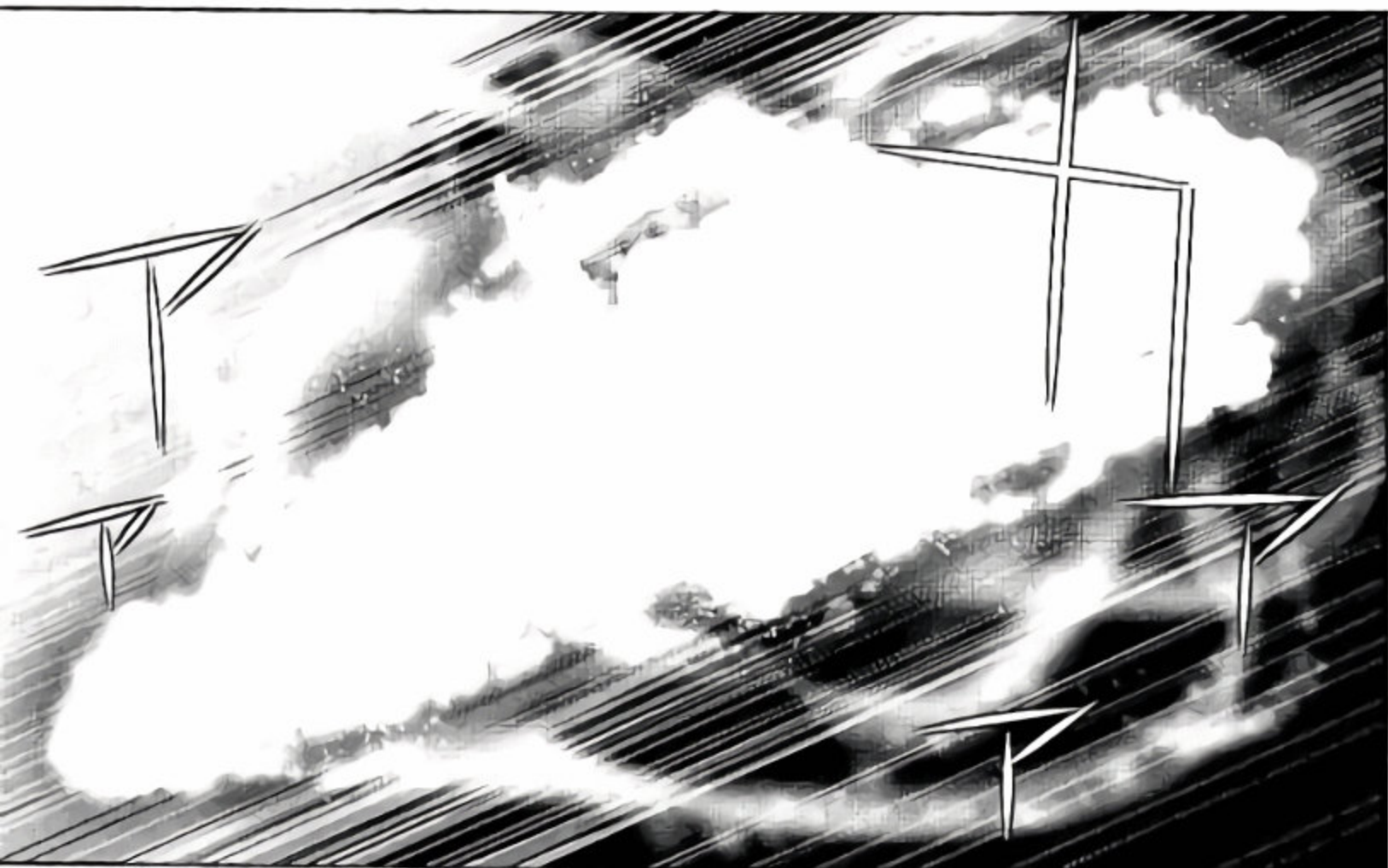
地を征く
騎馬としての
競い合いに
応じよう
というのか

そういう
心づもりならば
アイリスフィールの
身柄を押さえる
必要などなかった
はずだ……

いやそこは
ライダーと
そのマスターとの
思惑の齟齬なの
かもしれぬ

しかし——
ならば有り難い

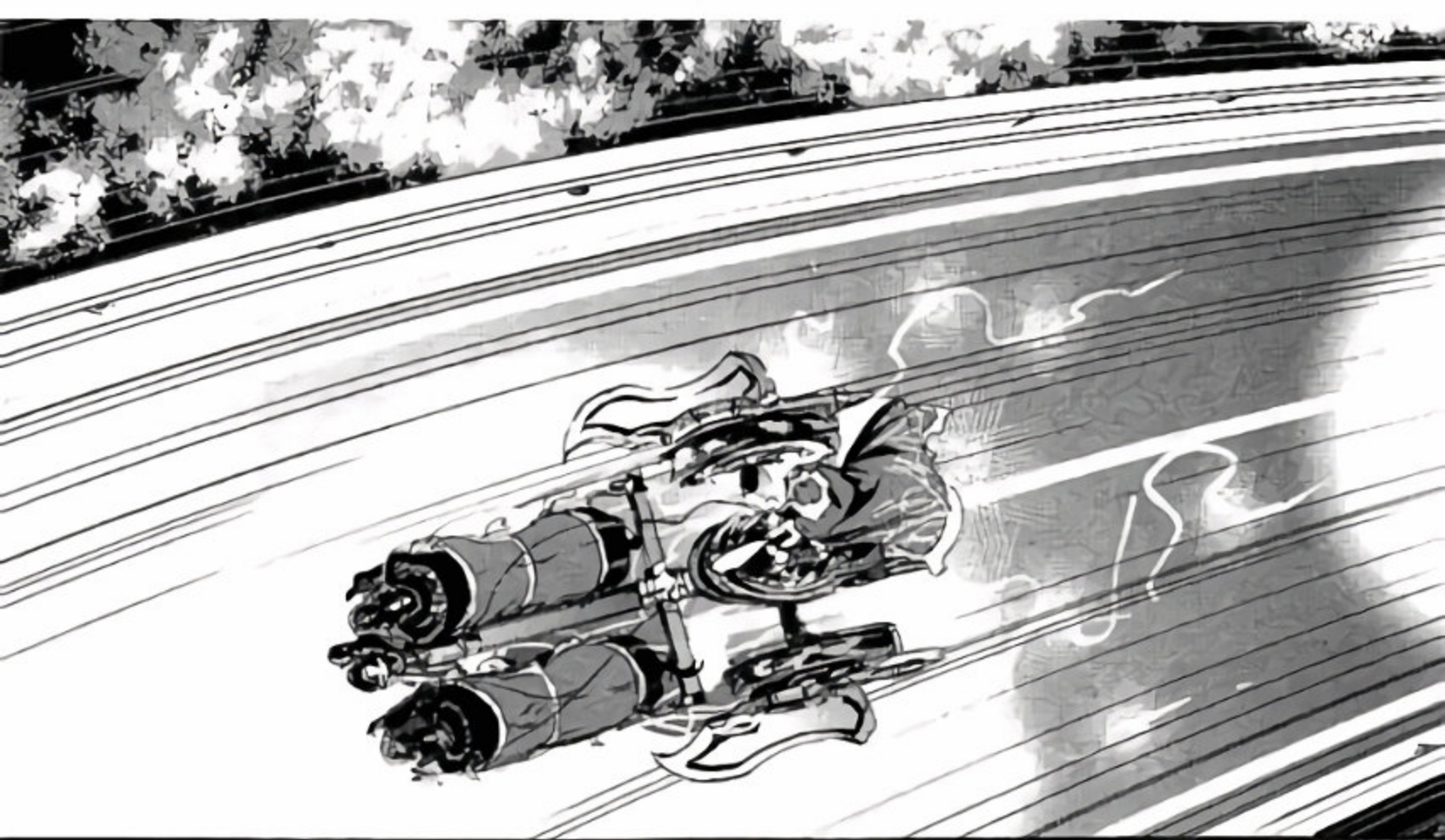












減速は

有り得ない

退がって
やり過ごせる
試練ではない

活路は唯一

突破ある
のみ!!





すごい……

ふははははッ！

上等！

それでこそ
誉れも貴き
騎士の王！

まっこと貴様は
戦場の華よな！



さあ続けて
いくぞー



木の次は
石の雨だ！

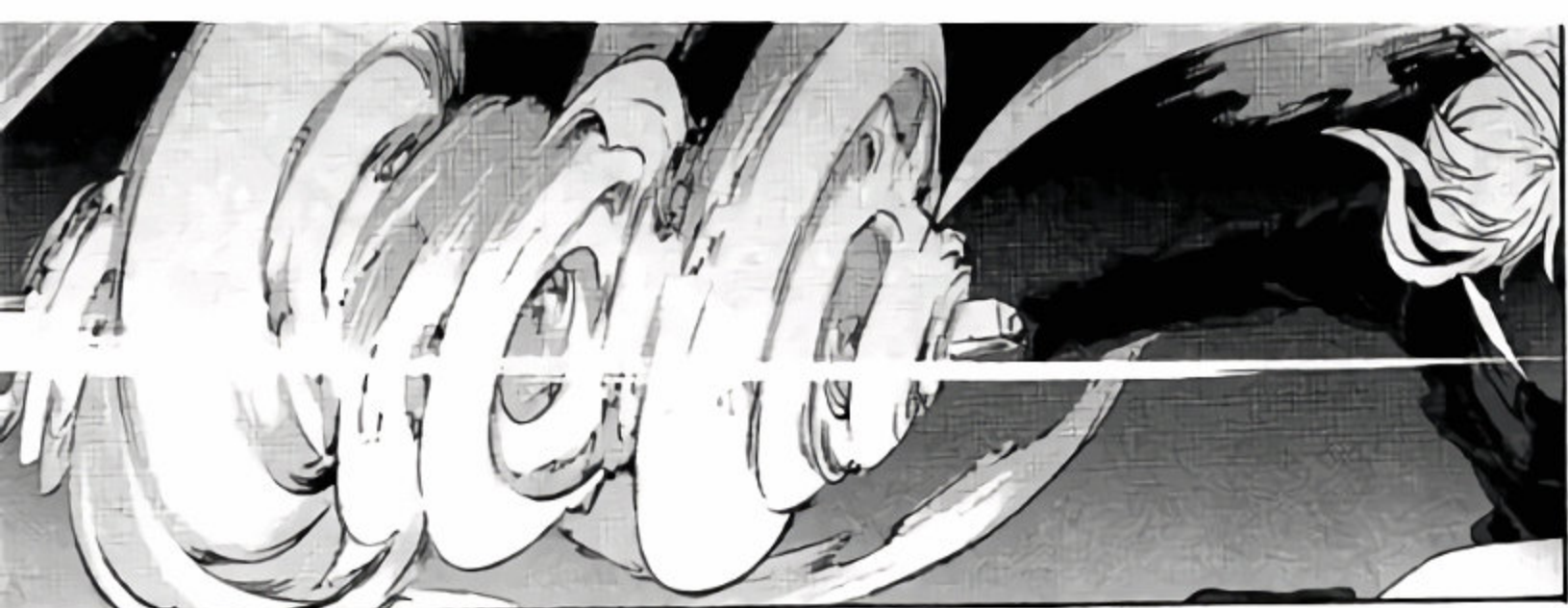


悔るなよ
征服王!



今の抵抗で
減速したか?





はめめめッ!!

インビシブル・エア
風王結界!!



うわああああああ!!



はてさてどうなるか

いまこそ勝機——！
しょうき



ライダーツ
かくこ
覚悟!!







そもそも
ライダーは一体
どこを目指して
駆けていた？

この国道の
先はアインツ
ベルンの森だ

彼らは私たちが拠点を
変えたことを知らず
今も森の城にいる
ものと思いきみ

馬鹿正直に
攻め込む心算で
戦車を駆つていた
のではないか？



クツ……

何者かに
謀られたと
いうのか？

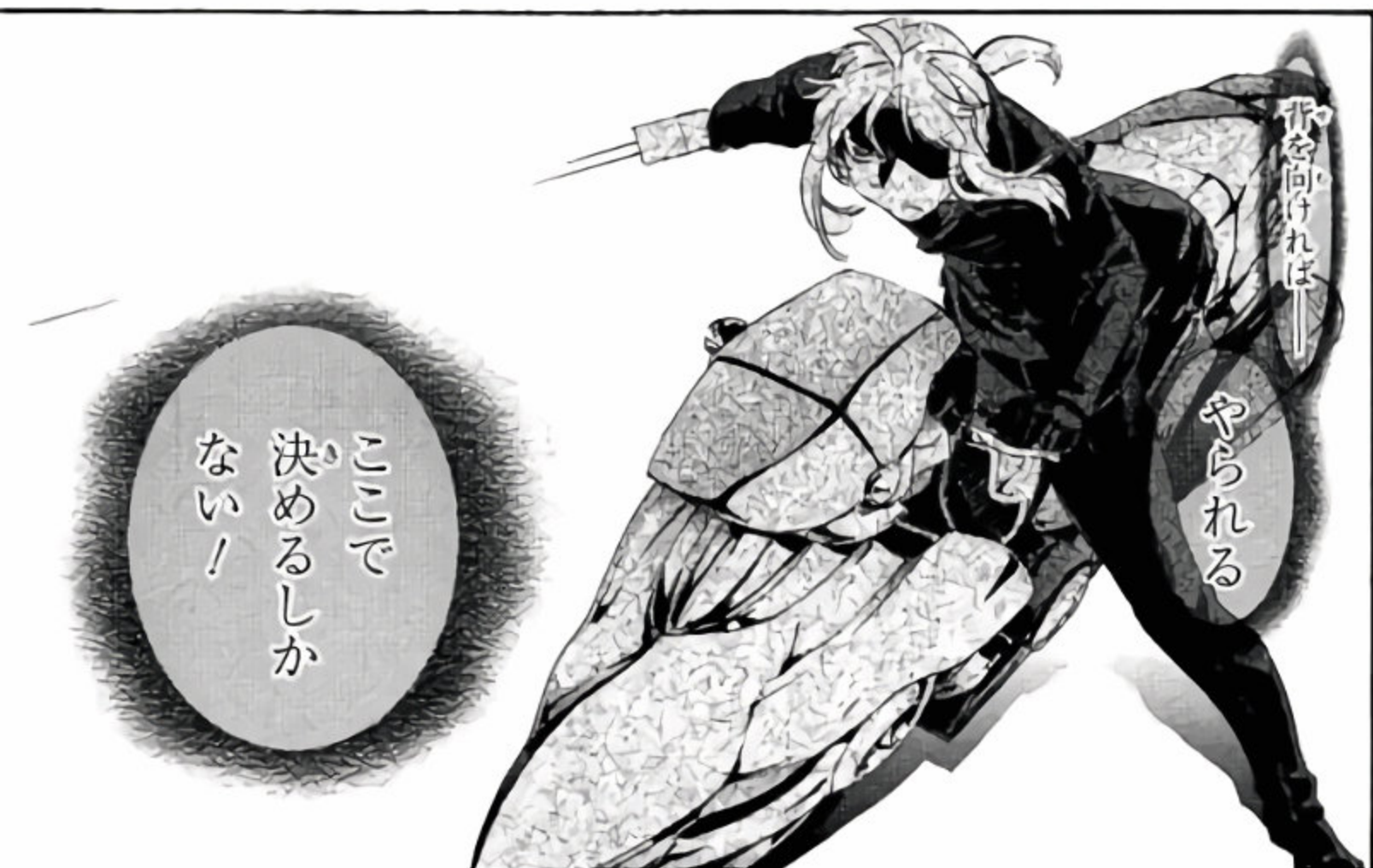
こんな処に
いる場合
ではない

新都に引き返し
アイリス
ファイルを
捜さなければ！



しかし……





ここで
決めるしか
ない！

背を向ければ

やられる

この距離
この位置関係は
明らかに拙い

しかも互いに
静止しての
睨み合い

遮蔽物のない
直線の道路

周囲には
巻き添えの
危惧もなし

明らかにこの状況は
セイバーの宝具
「約束された勝利の剣」
の独壇場だ!

ライダーも
わかってる
はずだろう!?

なあおい
ライダー…

うん

仮にも余の
マスターである
貴様には一応
ここで一言断りを
入れておかねば
ならんだろうな

これより余は
聖杯を狙う必勝を
差し置いて
ちよいと大きな
博打に出る

令呪で止めよう
と思うなら
今のうちだぞ?

……オマエ……
本気でここから
仕掛けるつもりか？

そうだ

この間合い
から？

真っ直ぐに？

セイバーが構えに
入ってからアレを
発動させるまでの隙に
余の「神威の車輪」が
この距離を駆け
抜けるか否か

という勝負
なわけだ

……勝算は
あるのか？

まあ
五分だな

なんで
オマエ……
そんな無茶を？


無茶だから
こそ——さ

ここまで拮抗した
状況から勝負を
挑まれたら
負けた方はそれこそ
何の言い訳も
面目も立たぬ

紛れもない
完敗だ

あのこまっ
しやくれた娘も
自慢の剣をまさか
この間合いから
踏み折られる
とは思うまい

そんな形で完敗すれば
あ奴とて己が不明に
痛み入り改めて
余の麾下に加わる
気になるかもしれん



……オマエ
そうまでして
あのセイバーが
欲しいのか？

うん
欲しいな

戦場において
アレは紛れもなく
地上の星だ

理想の王がどう
とかいう戯言なんぞ
ほざかせるよりは
余の軍勢に加えてこそ
本当の輝きを放つ
というものだ

……やれよ
ライダー

オマエの
やり方で
勝てばいい

フフン

貴様もいよいよ
覇の何たるかを
弁えてきたようだな

ライダーにとって
今この瞬間は
大勝負を挑む上で
逃しようのない
チャンス

次にセイバーと
対峙したとき
ライダーを今より
ましな状態に
維持しておける
保証はない

今までも無理で
道理を覆わして
きたんだろ？

今回もやって
みるよな
ライダー！

ト・フイロ
彼方にこそ
栄え在り

いざ征かん！

ヴァイア・エクス
遥かなる
ブグナテイオ
蹂躞制覇！！





イ
ク
ス
約束された









勝利の剣

!!





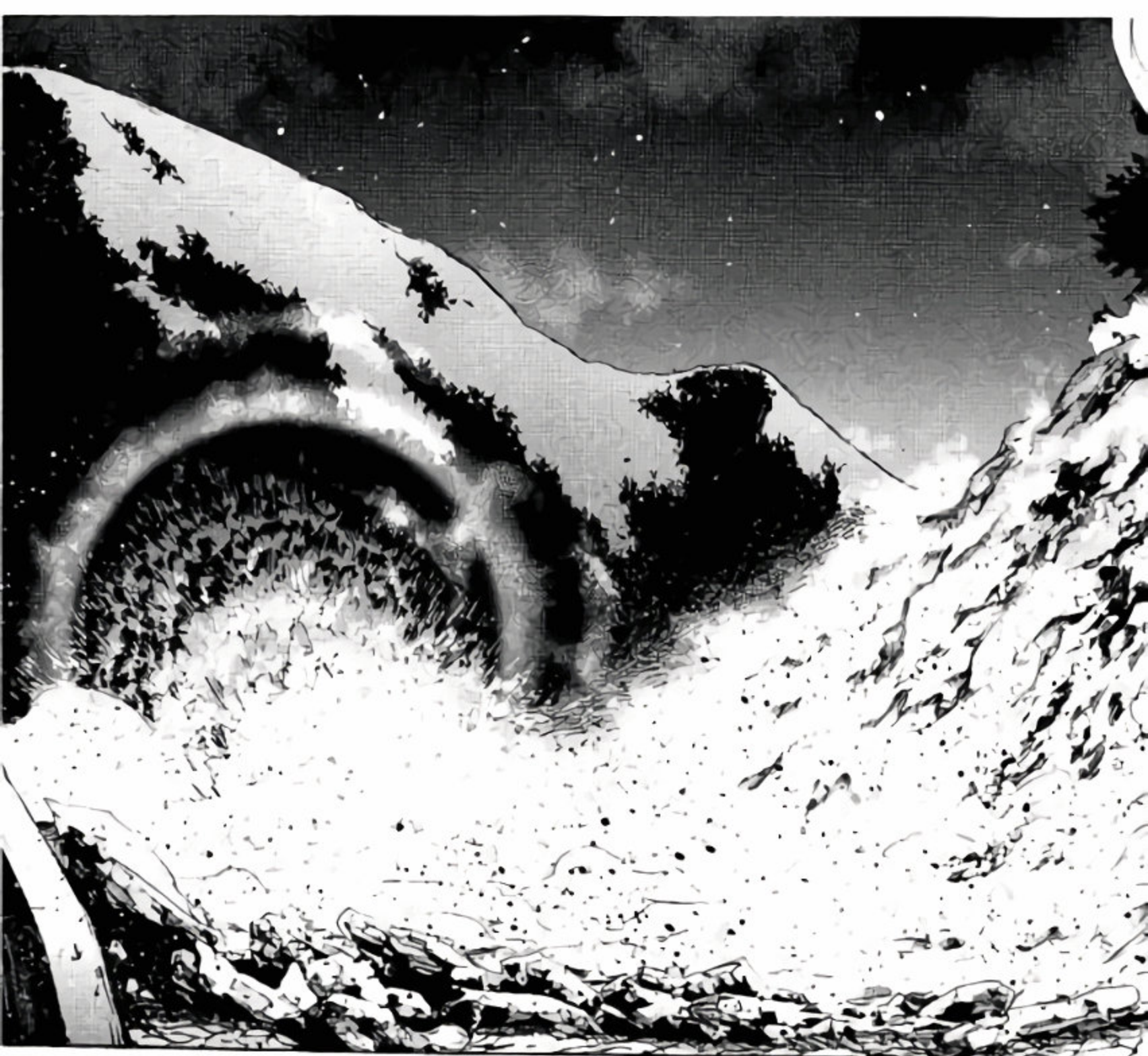
まだ
生きてる!!

あれ!!

うわっ!

あっちゃあ……
しくじったかあ

!



あれは
アーチャーに
とっておくと
言ったであろう



ライダー！
『王の軍勢』
を！

「神威の車輪」は
直撃を
喰らって……





行っちゃつたぞ……

?



バイクか……

ふむあれは
良いモノだ

オマエ
勝負に負けた
後の第一声が
ソレか!?



そりやあ
まあ

歩くしか
ないわな

……そうだな

なあ……
ライダー

ボクら
どうやって
街まで
帰るんだ?

第 56 話



何が聖杯戦争だ



そもそも
理解したいと
さえ思わんが



雁夜め……
なぜ今になって帰郷し
聖杯戦争に参加しよう
などと思ったのか

まったく
理解できん



あんなモノともが
今もこの夜の闇の中で
血肉を喰らいあつて
いると知ってれば

正気で
いられる方が
どうかしている



何であれ弟を
翻心させた事情に
ついては
いくら
感謝しても足りん



さもなくば
あんな姿にされて
戦いに駆り出されたのは
私の方だったのだから
しれないのだから



今の冬木は
真正正銘の
魔界だ

酒でも
飲まなきや
平気では
いられない



慎二と共に国外に
避難したかった
ところだが――

桜を地下の蟲蔵で調教し
間桐の次期頭首として
相応しい器に仕立て
上げるという
爺から仰せつかった
重要な役目があるからな



そうだ 当代の
間桐家を預かる
主としての役目だ

しよせん雁夜は
あの老魔術師の
玩具にされて
いるにすぎない

いま間桐の正道を
踏まえているのは
私の方だ

私自身の
魔術回路の
数など問題
ではない

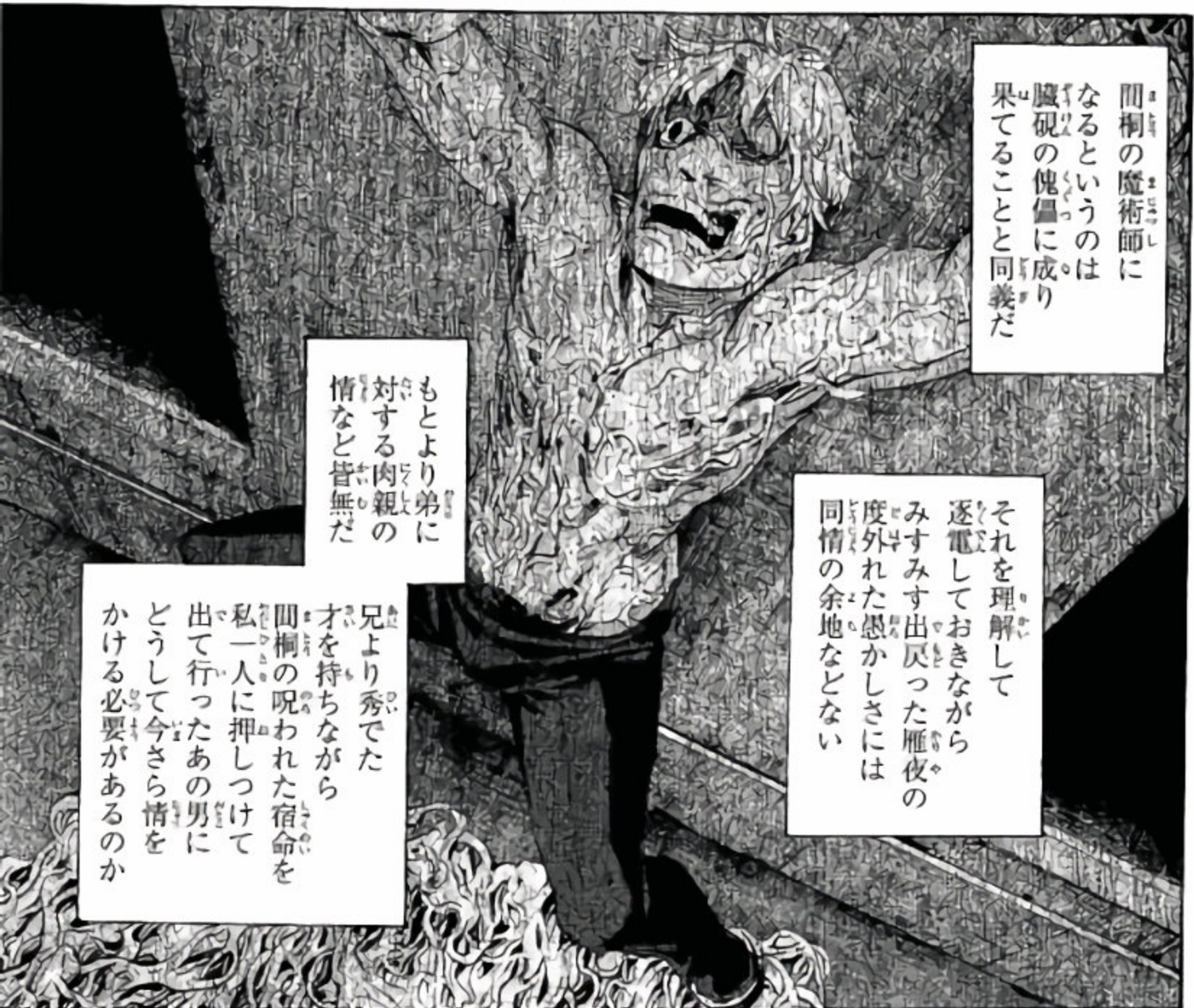
たとえ子供一人を
鬪りものにするしか
能のない身でも
真に間桐の未来へと
繋がる道を歩んで
いるのは自分の方だ

間桐の魔術師に
なるといふのは
臙矚の傀儡に成り
果てることと同義だ

それを理解して
逐電しておきながら
みすみす出戻った雁夜の
度外れた愚かしさには
同情の余地などない

もとより弟に
対する肉親の
情など皆無だ

兄より秀でた
才を持ちながら
間桐の呪われた宿命を
私一人に押しつけて
出て行ったあの男に
どうして今さら情を
かける必要があるのか







……アイリス
ファイルは
どこだ？



——は!?

待て！何を言っ
ているんだ

この男は？

質問の意味が
分からないぞ!?



あひつ
ひゅ……

返答でき
なければ死ぬ
殺される！





.....

手がツ!

ぎゃあ
あああッ!



しししし知らない
知らない知らない!

私は何も
知らないッ!

あああああッ!



クソッ!

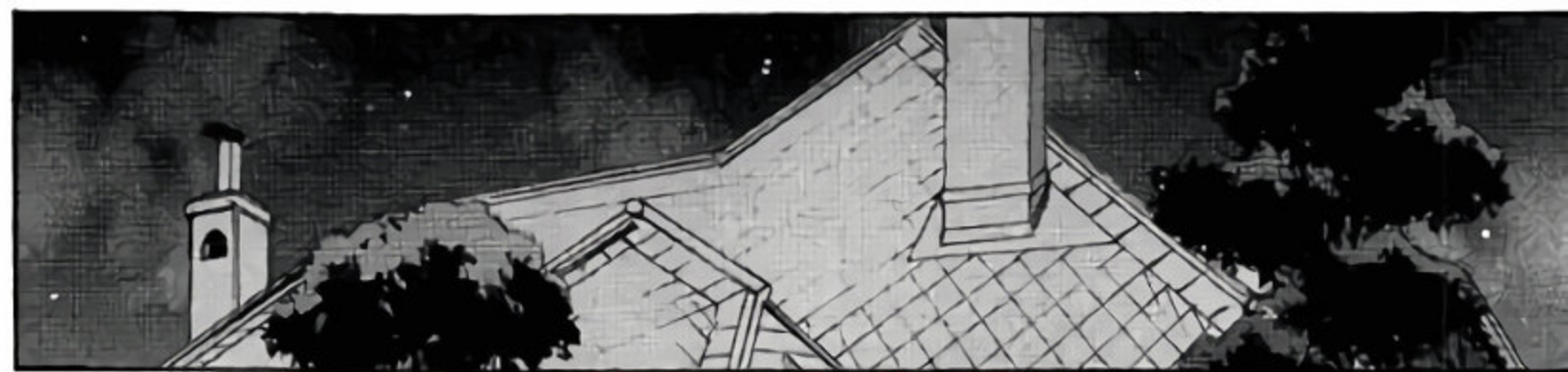
こいつには
これ以上
問はずしても
無駄だな

ここ数時間の
うちに起こった
事態について本当に
何も知らない
のだから



拉致されたアイリが
運び込まれたのは
この間桐邸ではない

数時間かけて
防護結界を突破
したのに収穫なしか





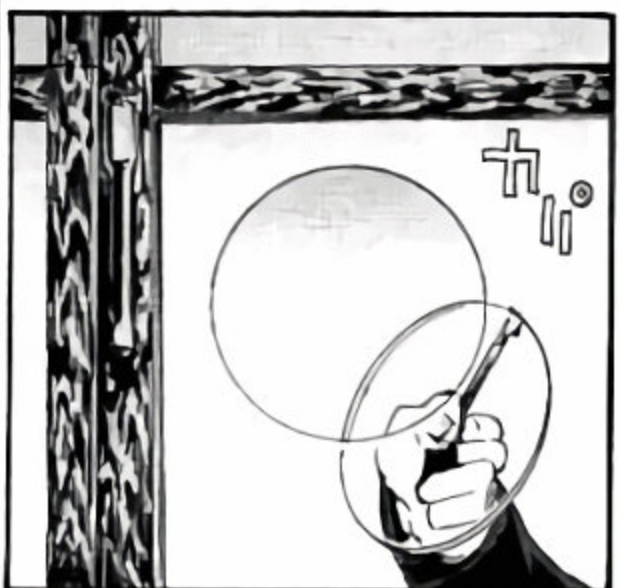
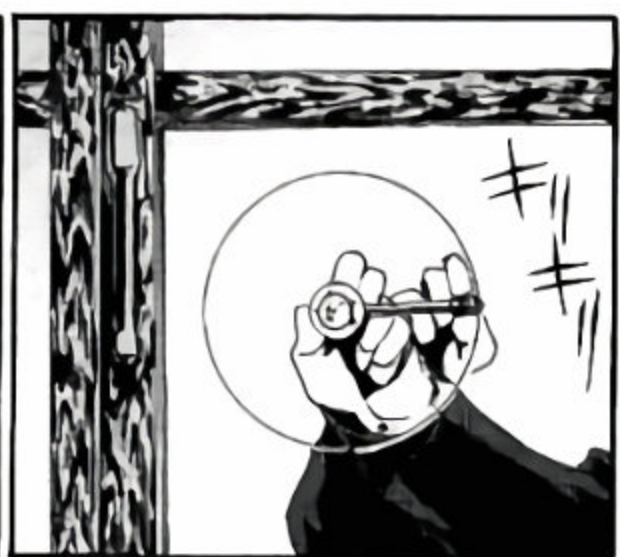
もし無事に保護されたならばアイリは発信器を起動させ僕に位置情報を送っているはずだ

アイリを追ったはずのセイバーも奪還には失敗したと判断せざるをえない

魔力供給の経路に手応えがある以上撃破されたということはないはずだが……



結界の解除でここまで来るのにもう三時間……クソッ!





できれば避けたいが
戦略を選べる
状況ではない……

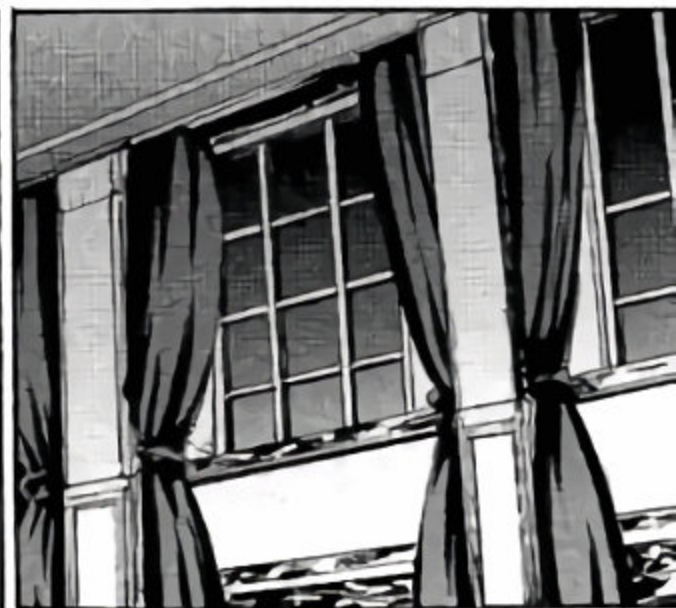
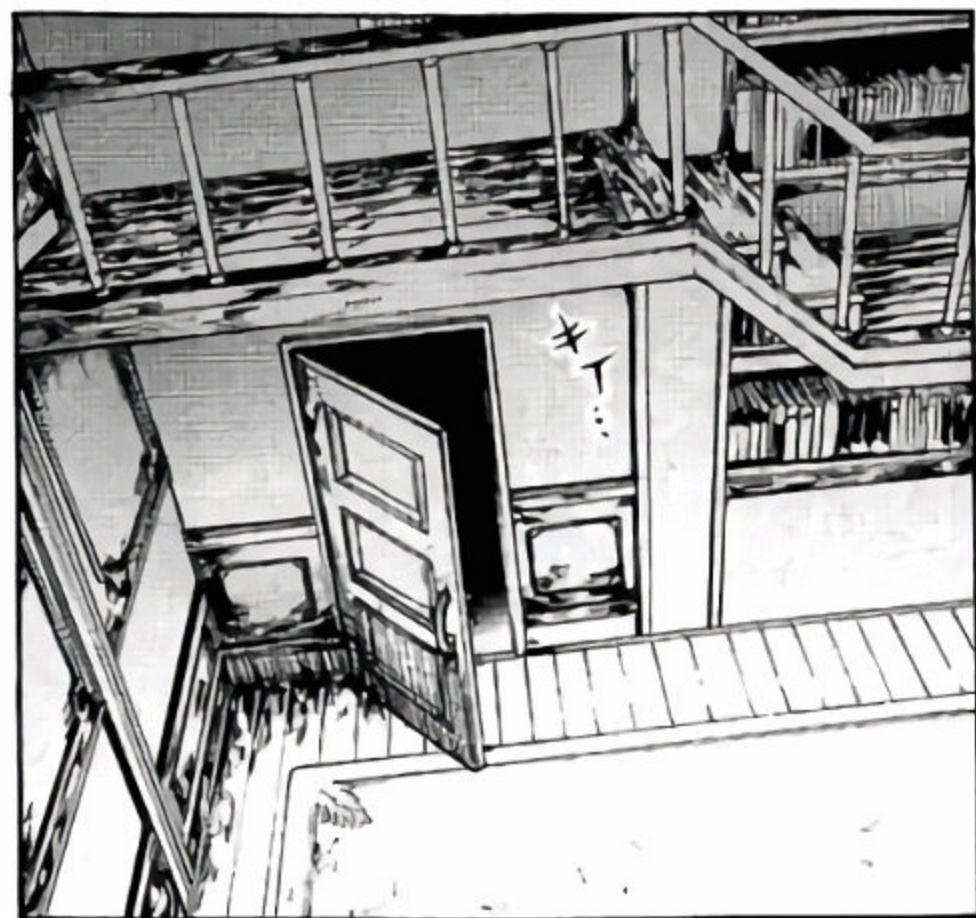
遠坂時臣と
鉢合わせになった
場合には戦闘を
覚悟しておくべきだ

もしクローマークの敵が
アイリを押さええているなら
間桐や遠坂と対決し消耗
するのは敵の思う壺だ

その場合には
アーチャーに備えて
また令呪を消費して
セイバーを呼び
寄せる必要がある



留守宅のような
気配だが……





血臭
けつしゅう

かなり時間が経過しているが
間違いない



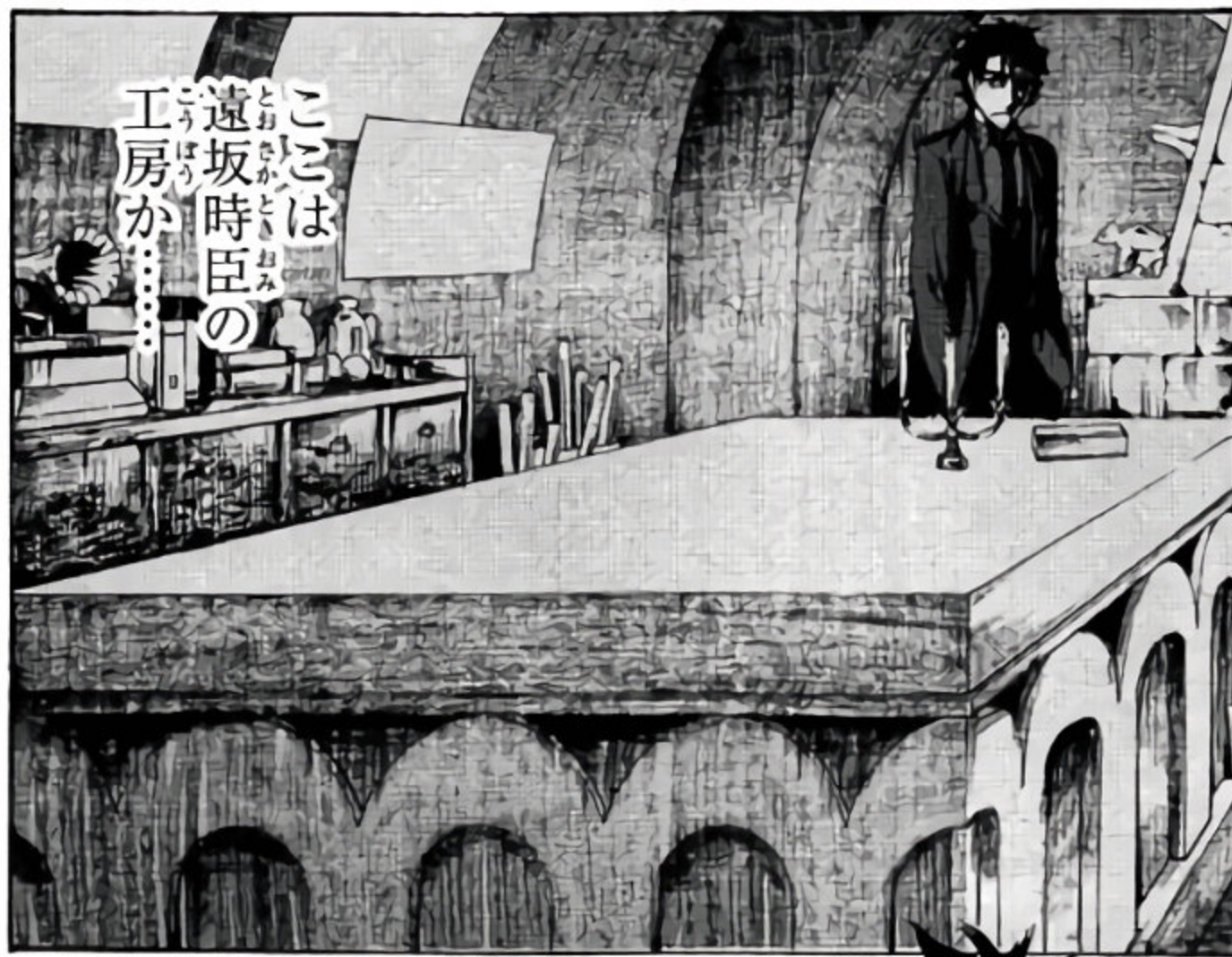
媒介や術の起点として
とかく魔術において
重要な要素と
なるのが血液

呪的な意図もなく
血液をそのままに
放置しておくのは
魔術の嗜みとして
論外ともいえる



飛び散った飛沫
ではないが
ただの怪我で済む
出血量ではない

経験上「刺殺された
人間が倒れた後の
染みのように見える



ここは
とおひかとおみ
遠坂時臣の
工房か……

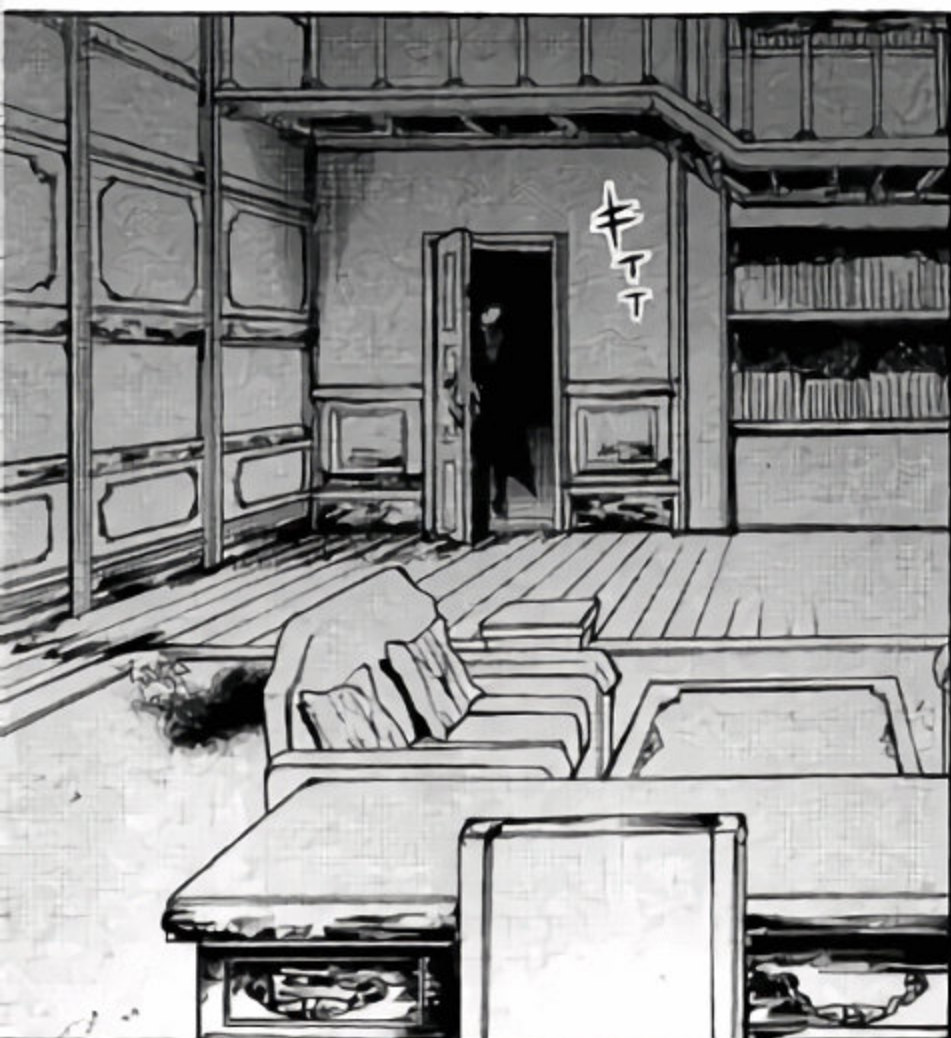
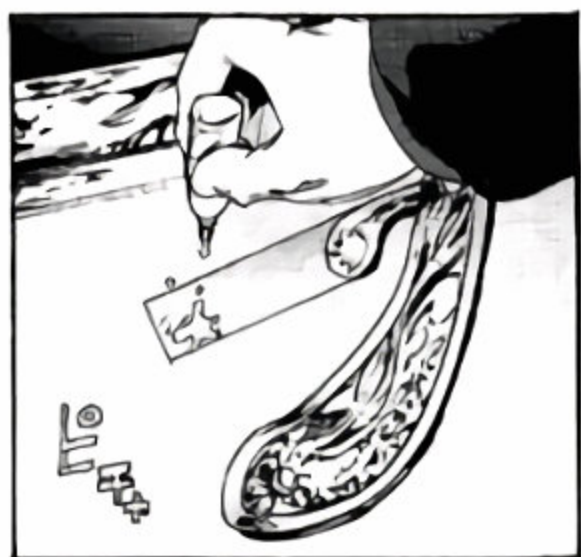


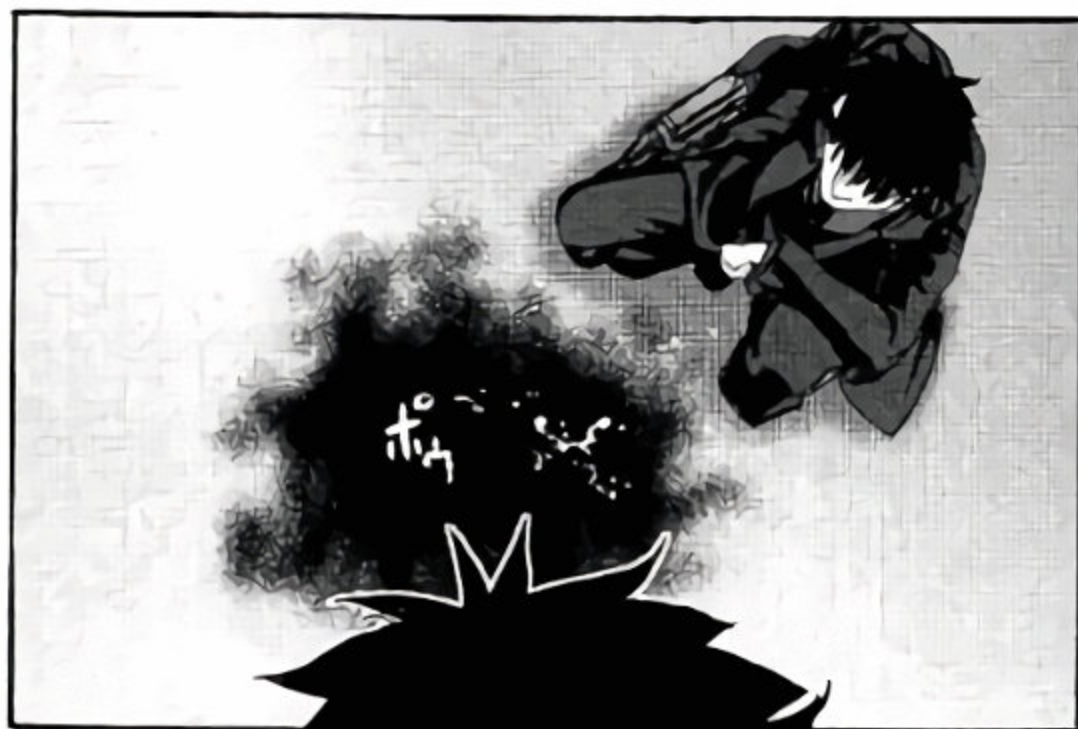
おそらく時臣は
不在どころか
自宅の様子すら把握
できない状況にある



たとえ留守中でも
魔術師が自らの工房へ
無断で他者を踏み
込ませるはずがない







だが
アーチャーは
その時何を
していた？

まさかマスターの窮地を
座視していた筈もない

敢えてその可能性が
あるとするなら……
時臣が既に
マスターとして
用済みだった場合

次なる契約者と
申し合わせた上で
時臣を謀殺したのなら
この結末にも納得がいく

遠坂時臣の知己であり
彼が賓客と見なしして
隙を見せても
おかしくない人物

アーチャーの新たな
マスターとなり得る
今から改めて令呪を
獲得した可能性が
大な——

即ち過去に
サーヴァントを喪失して
マスター権を失い
かつ未だ存命の人物



ことみね
言峰

きれい
綺礼



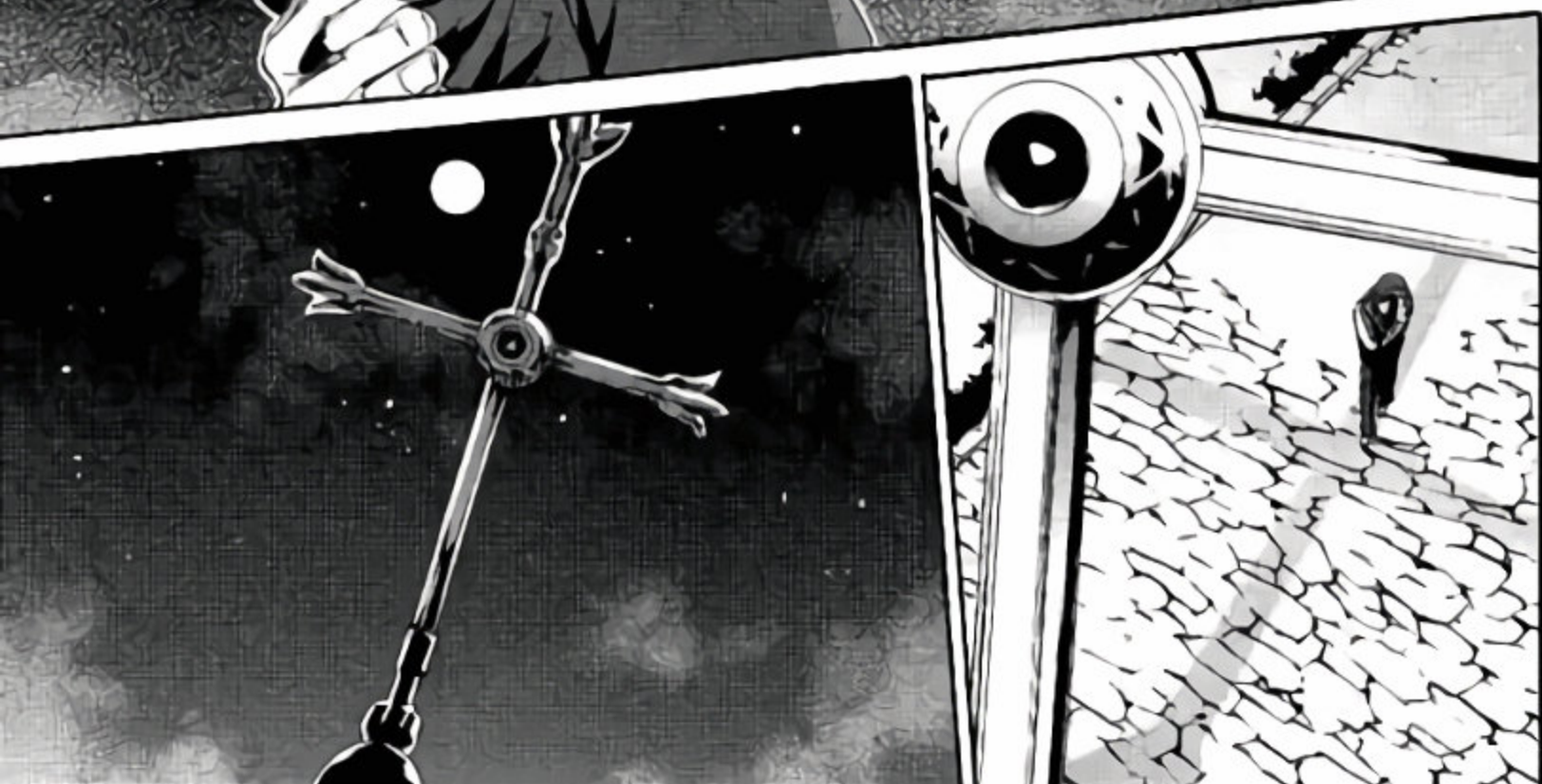
—30:02:45



日々朽ちていく
この体であと何回
戦えるのか

あと何日
生きて
いられるか

この手に聖杯を掴み
桜ちゃんを救うなんて
それこそ奇跡を
期待するしか
ないんじゃないのか？





なにも自分
救いを求めて
こんな時間に教会に
赴いたんじゃない！



今度こそ奴を
殺すんだ！



桜ちゃんを
棄てた時臣を！

葵さんを
奪った時臣を！



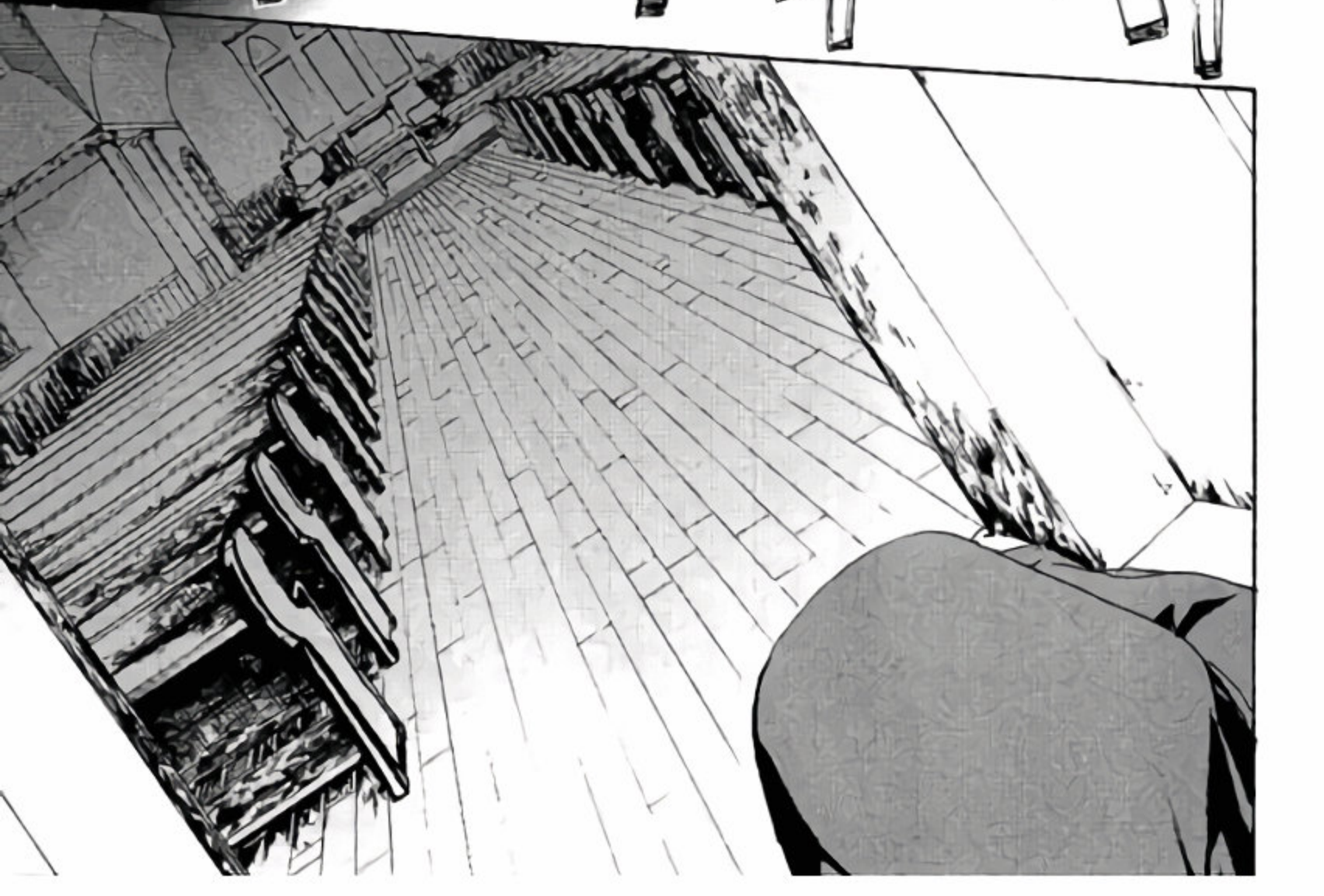
じょうだん
冗談じゃ

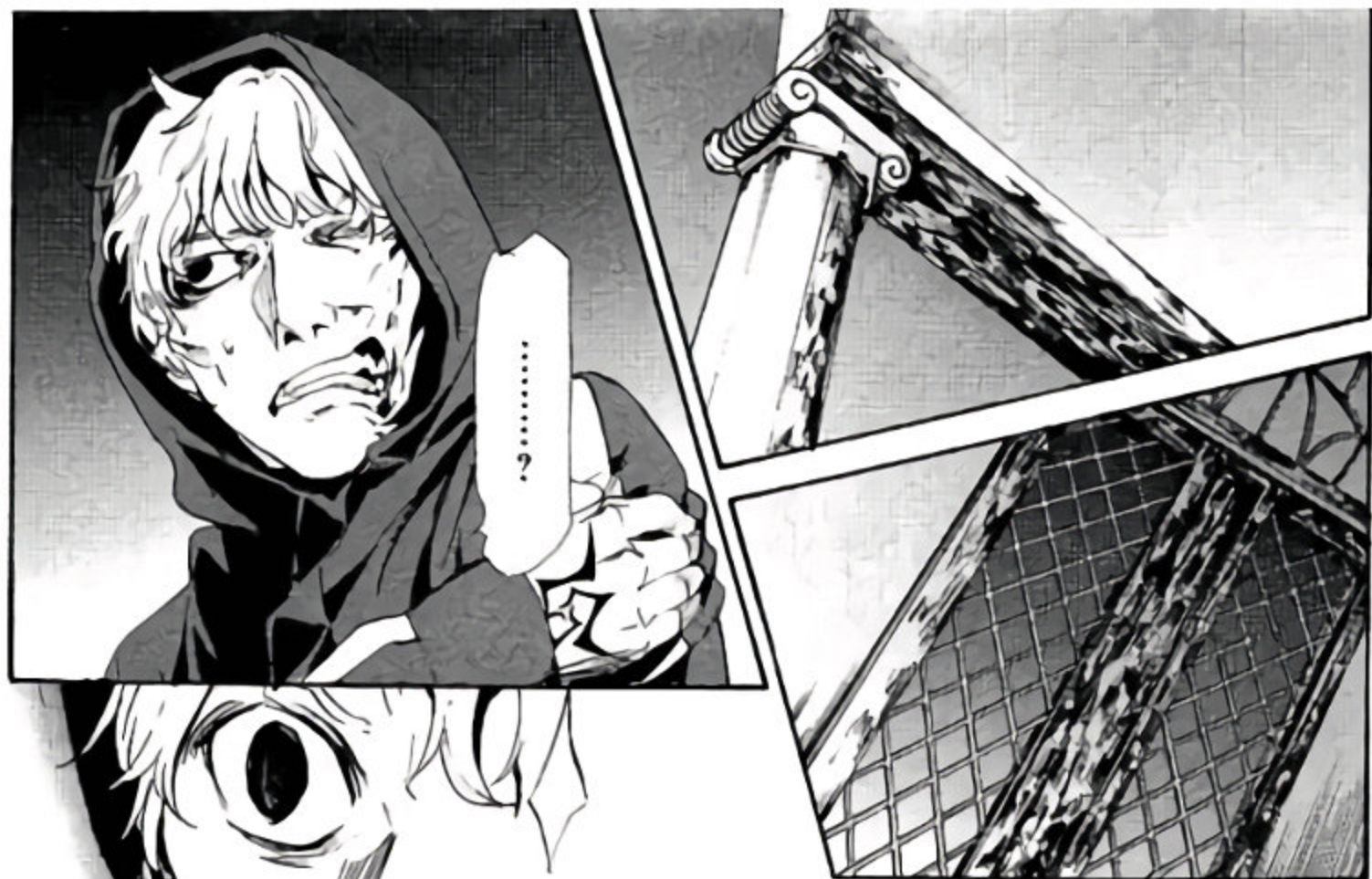
ない

ッ！



この手で
叩き伏せる！
たたか
か





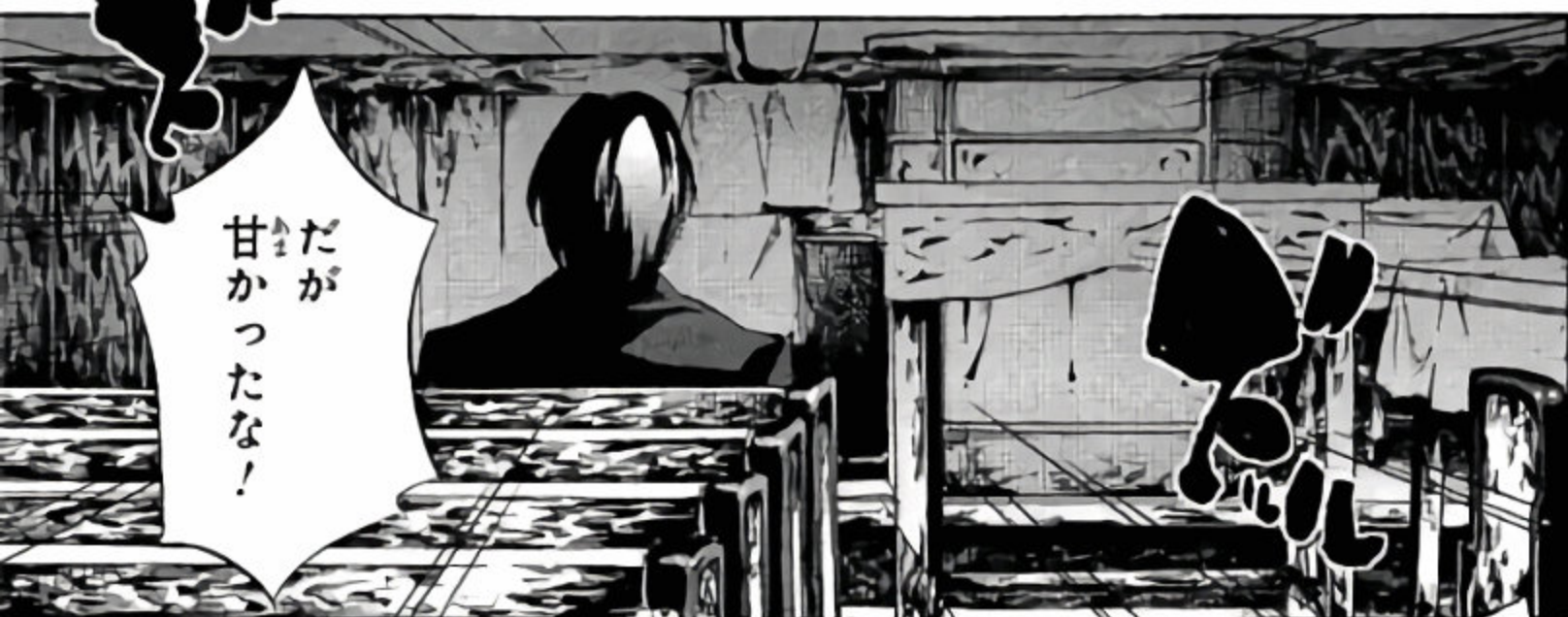
とのおみ
時臣
イ……ツ！

とのおみ
遠坂……

ハッ



俺を殺した
気でいたか
時臣？



だが
甘かったな！



ピア

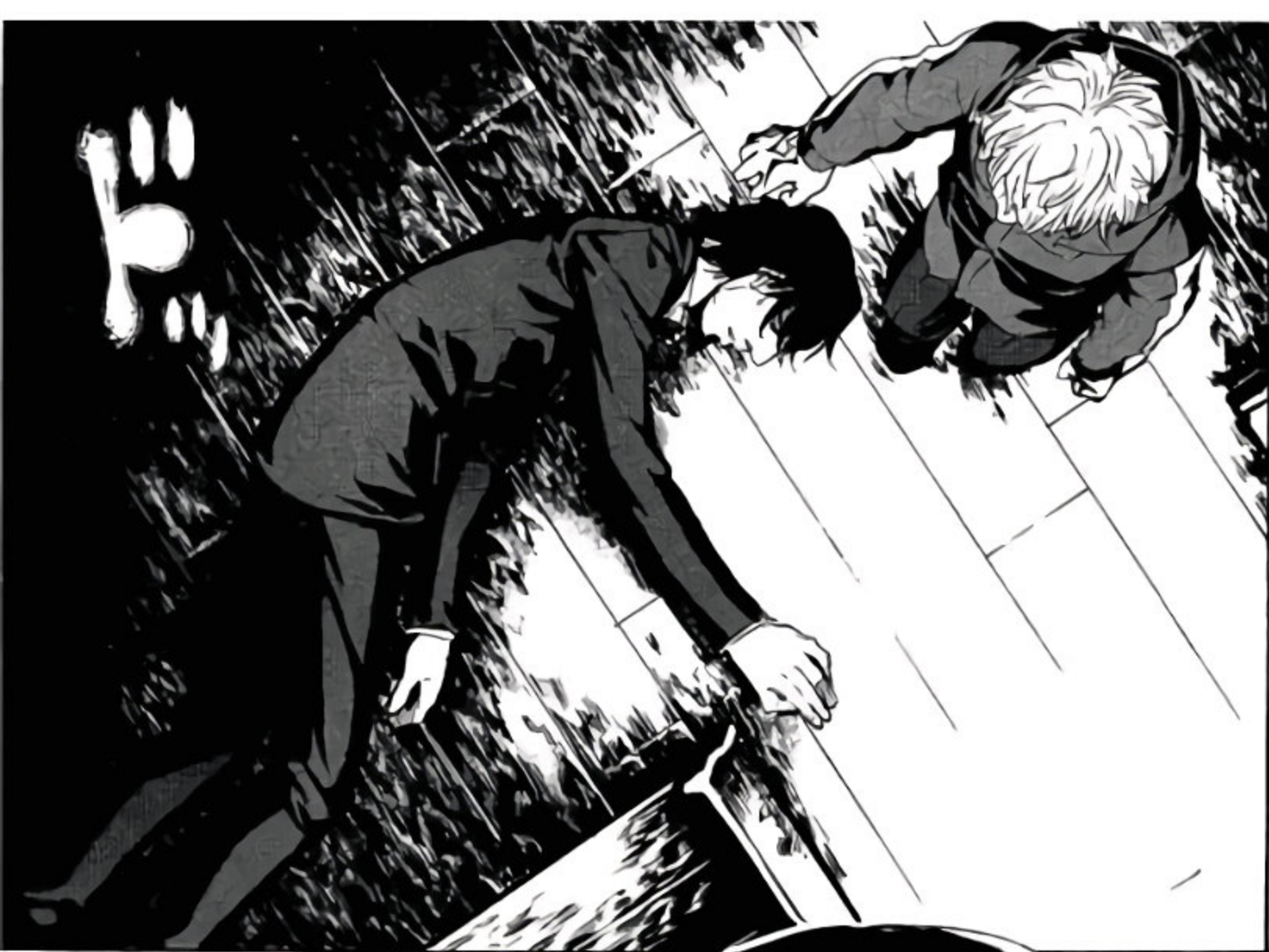


貴様に報いを
与えるまで
俺は何度でも……！













俺は二度と葵さんを泣かせないようにと命を捨てて戦ってきた

ならば目の前で泣いているこの人はいったい誰なんだ？



何故葵さんは俺を見ようとしない？

このヒトの涙はいつたい何なんだ？

どうしてこのヒトは時臣しか見ていない？



……これで聖杯は間桐の手に渡ったも同然ね



俺は――

なぜ咎められなければいけない？
だって俺は――



満足してる？

雁夜くん



どうして
……よ……

間桐は私から桜を奪っただけじゃ物足りなかったの？



遠坂時臣は諸悪の根源だった

あの男さえいなければ全てが上手くいくはずだった

そもそもなぜこいつはこんな場所で死んでいた？



よりもよってこの人を私の目の前で殺すだなんて……

どうして？

そんなにも私たちが憎かったの？

わけがわからない



この女はなぜ葵さんにそっくりの顔で葵さんのような声でこんな憎しみを

殺意を俺に向けているんだ？

俺は葵さんを救った彼女の愛娘に未来を取り戻すはずなんだ

それがなぜ恨まれる？

この女は誰だ？





オレ

は

好きなヒトがいた

温かくて優しくて
誰よりも幸せに
なってほしい
ヒトがいた

彼女の為ならば
命さえ惜しまないと
そう思ったからこそ

今日まで

どんな痛みにも

苦しみにも

耐えて耐えて

耐えて

耐えてきたのだからか否定されていいわけが

俺高のため

せろわけがない

木下正氏さん

おはようございます。木下正氏さん、お久しぶりです。お元気ですか？









あ……あ……



ああアツ!



ああアツ



ああアアああ!!



ああああああアアアア
ああアアああ……ツ!



……何故
だろうな

前にも飲んだ
ことがあると
いうのに……

このワインが
こんなにも
味わい深いとは
気付かなかった



くだらぬ三文劇
ではあったが
まあ初めて書いた
台本にしては
悪くない

どうだ綺礼？
感想は



次ページから始まる
番外編
◆Master's personality◆
は、TYPE-MOONエース
VOL.10に掲載された
ものです。



凛が成人して
独り立ちの資金が
ないと気付いた時の
願はきと見物だろう





おっとと失礼

HAKKEI!

さりげなく凛の足の小指を柱の角にぶつけさせたり

ツ!!

凛がトイレに入るタイミングを見計らって紙を全て回収したり



悪夢を見るように睡眠中の凛の枕元で延々呪詛を唱え続けたり



夜明け前に凛の小学校に潜入して凛の靴箱に呪いの手紙を忍ばせたり

凛の靴に画紙を仕込んだり



アサシンに不審者の真似で凛をストーキングさせて怖がらせたり

魔術師の真実を描いた絵物語を
読ませて現実を
教えてやったり

えーつとお父様が
読むように言ってた
初習者用の本は…
これだっけ

あれ？
何か挟んである

マスター3名が
一堂に会した場合の
行動予測……？

うええ……
みんなが戦ってる
理由が……

小学校低学年の
私でもこんなこと
しないのに
お父様まで……

え？これが
魔術師の典型？
ウソ……幻滅……

あでも一流の
魔術師はこんな
こともできるんだ
やっぱ凄い……

といった具合だ

無意識で
そこまでできて
たまるか

日常の習慣に
なっていて記憶に
残らなかったようだ

優雅

余計に
悪質だな

しかし——



衛宮切嗣が私と
同種の人間だとすると
あの女たちは被虐性欲の
変態メス豚どもであり

アインツベルンの
森での不可解な行動は
快樂目的でもあったと

そして
女たちの主である
衛宮切嗣は異常な
性的倒錯者であると
結論せざるを得ない

私はそこまで
歪んだ人間ではない



衛宮切嗣
あの男が聖杯に求める
ものとは一体……

土蔵が襲撃を受けた直後



令呪をもう一画使って
セイバーに藤村組まで
取引に行かせるか？

衛宮切嗣という
機械を正常に
動作させるには
クスリが必要だ！



クソッ！
アンフェタミン
を使い切って
しまった！



無事でいてくれ
アイリ!
それに舞弥!



あ! なるほど
そうか!
この願いは聖杯に
託せば良いのか!



空にイリヤが見える...
禁断症状だ...
てもやめられない
止まらない!

って僕は何を
考えてるんだ

これじゃ
ただのヤク中
じゃないか!

ツルツル



.....
だめたよ

ないたら...

けさやっど...
昔のキリツグに
なったんだから

こんなことで
申れたら...
ため.....



泣いちゃ
ダメだ!
泣いちゃ
ダメだ!

ッ!

